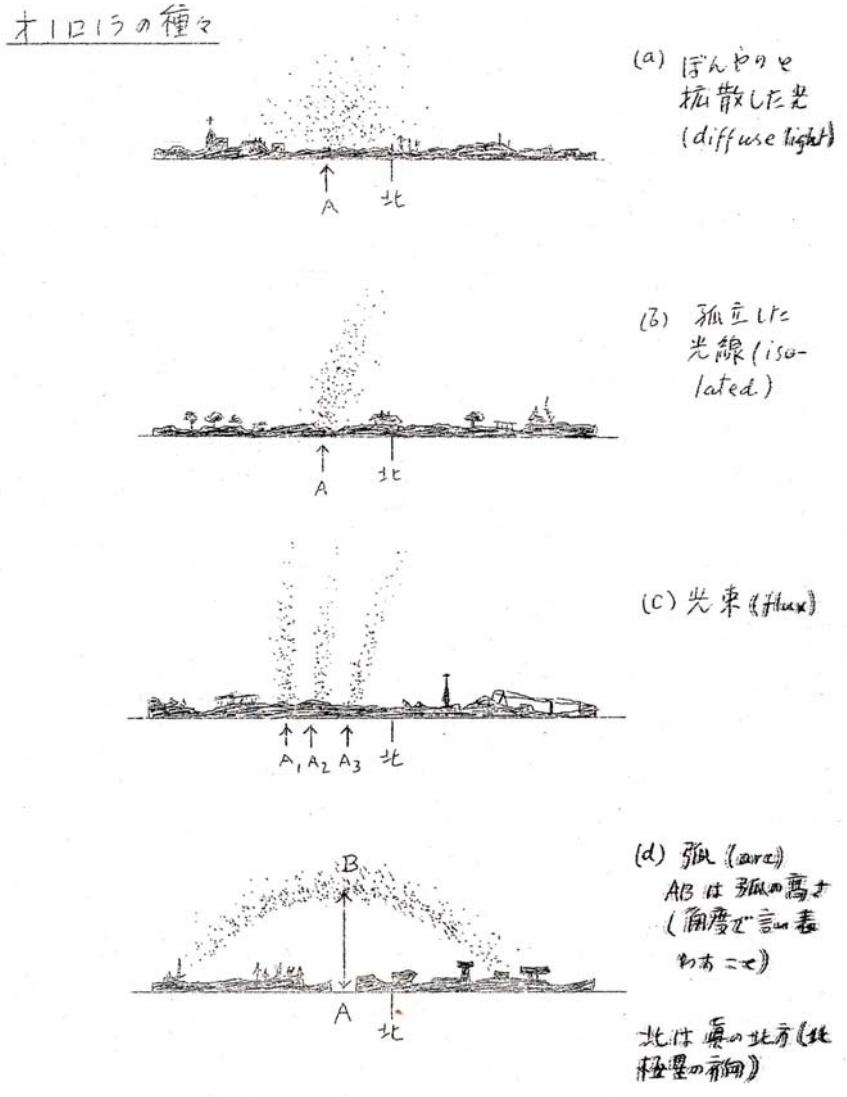
第 37 号　　1957 年

星と空（ほし　そら）

STARS & SKY

滋賀県草津市外（瀬田局区内）山本天文台内東亜天文学会発行

1957 年 2 月号　月　刊　誌　（1957 年 1 月 25 日発行）



『星と空』に掲載されました山本先生の思い出記事はその思想、友人関係そのものを伝える一次資料として貴重なものですので、晩年の筆圧の一定しない手書きの小さな文字で読みづらいガリ盤刷からワープロに入力しました。表紙には全 42 号のうちの第 37 号の表紙デザインを使いました。年号や号数などあきらかな間違いは訂正しました。

(2014 年 4 月、冨田記)

一　覧

・あの頃の思い出 (1)［一大流星の撮影］ 第 2 号、1954 年 1、2、3 月
・あの頃の思い出 (2)［私の初めての天体観望］ 第 3 号、1954 年 4 月
・あの頃の思い出 (3)［最初の渡米の頃］ 第 4 号、1954 年 5 月
・あの頃の思い出 (4)［鷲座新星の発見］ 第 5 号、1954 年 6 月
・あの頃の思い出 (5)［跳るペルセウス］ 第 6 号、1954 年 7 月
・あの頃の思い出 (6)［水沢の二年間］ 第 7 号、1954 年 8 月
・あの頃の思い出 (7)［センチュリ大辞書をなつかしむ］ 第 8 号、1954 年 9 月
・あの頃の思い出 (8)［フィンレイ・佐々木彗星の発見の頃］ 第 9 号、1954 年 10 月
・あの頃の思い出 (9)［ペライン彗星の失踪であきらめられない気持ち］ 第 10 号、1954 年 11 月
・あの頃の思い出 (10)［ヘンリ・ノリス・ラッセル教授のこと］ 第 11 号、1954 年 12 月
・あの頃の思い出 (11)［日本各地で地球の引力を測る］ 第 12 号、1955 年 1 月
・あの頃の思い出 (12)［花山天文台創立の前後］ 第 13 号、1955 年 2 月
・あの頃の思い出 (13)［処女作『星座の親しみ』の由来］ 第 14 号、1955 年 3 月
・あの頃の思い出 (14)［自転車に乗り始めた頃］ 第 15 号、1955 年 4 月
・あの頃の思い出 (15)［ハーバードの三羽烏］ 第 16 号、1955 年 5 月
・あの頃の思い出 (16)［初めて読んだ天文書］ 第 17 号、1955 年 6 月
・あの頃の思い出 (17)［暑さとの戦い］ 第 19 号、1955 年 8 月
・あの頃の思い出 (18)［大学の大火事］ 第 20 号、1955 年 9 月
・あの頃の思い出 (19)［彗星 Pons-Coggia-Winnecke-山崎-Forbes-Crommelin］ 第 21 号、1955 年 10 月
・あの頃の思い出 (20)［ペライン博士に会った頃のこと］ 第 22 号、1955 年 11 月
・あの頃の思い出 (21)［台湾の日食の頃のこと］ 第 23 号、1955 年 12 月
・これからは余分の生涯 (所感)　 第 24 号、1956 年 1 月
・わが交友 (1) Harlow Shapley　第 25 号、1956 年 2 月
・わが交友 (2) Otto Struve　第 26 号、1956 年 3 月
・わが交友 (3) G. Van Biesbroeck　第 27 号、1956 年 4 月
・わが交友 (4) Miss Anne S. Young　第 28 号、1956 年 5 月

・紀州の旅　第30号、1956年7月
・名古屋えの行き帰り　第31号、1956年8月
・Lowell Observatory Visited 3回ローエル天文台を訪問（その日の日誌）　第32号、1956年9月
・オーロラを見た日[Auroral Apparitions]　第33号、1956年10月
・ゆかりの友　水野千里さん　第35号、1956年12月
・ゆかりの友（2）　古賀和吉さん　第36号、1957年1月
・ゆかりの友（3）　伊達英太郎君　第37号、1957年2月
・ゆかりの友（4）　三沢勝衛さん　第38号、1957年3－4月
・ゆかりの友（5）　古川龍城君　第39号、1957年5月
・ゆかりの友（6）　大庭濱子さん　第40号、1957年6月
・ゆかりの友（7）　水野恭介さん　第41号、1957年7月
・ゆかりの友（8）　スコフィルドさん　第42号、1957年8月

あの頃の思い出（１）　一大流星の撮影

1927 年 3 月 3 日に、期待されてゐたキンネッケ彗星が米国ヤーキス天文台でヴンビースブルック氏に再発見され、初め光度は 16 等級であったが、漸次に地球に近づいて来ると共に、明るくなって来た。この星は 1921 年の夏にもやって来て、はなはだしい微光流星を見せたことがあって、親しみを感じてゐたが、こんどはやはり 6 月 21 日に近日点へやって来ると共に地球にも非常に接近する筈であったので、流星の出現も期待された。

あたかも、此の彗星が近づいて来る時期が日本内地の梅雨期に当ってゐたので、それを避けるため、自分は満州へ出張する計画を立てた。幸ひ奉天には天文学の好きな西岡栄太郎氏が居り、同氏の尽力で同地の教育専門学校の有ってゐる口径 11ｃｍの屈折赤道儀を使用させて頂くことになって、自分は京都から只、計算に必要な書物や筆紙類のみを持った姿で、6 月 13 日に出発し、岡山、下関、京城あたりで友人の見送りを受けつつ急行し、15 日に奉天着。翌 16 日に赤道儀を茶町の西岡氏邸の裏の広場に据えつけ、即夜調節して 16 日から規則的に彗星の写真観測を始めた。

当時は日本とシナとの間の国際関係が微妙であり、奉天市内でも物状騒然としてゐた。この市内で、毎夜屋外で天文観測をするのであったが、この仕事は既に新聞によって内外に知れわたって居り、世間では天文を口実に、“山本が夜暗に乗じて何をするのか分ったものでない”と言ったやうな噂が立ってゐたらしい。そこで、自分は西岡氏等と協議のうえ、猛犬や番人を幾人か雇い込んで、終夜器械の周囲を警戒させ、そんな空気の中で、写真観測を遂行するのだった。幸ひに殆ど毎夜空はよく晴れ、彗星は予期の軌道を進行して来て、20 日頃からは肉眼にも見えるほどの明るさとなった。この彗星に伴ふ流星も沢山飛んだが、この方は北海道へ分遣された中村要君に任せてあったので、自分は専ら彗星の撮影をやった。

6 月 29 日正午過ぎには日食があったが、これは英国辺では二百年ぶりの皆既食なのでよほど騒がれたけれど、東洋方面では部分食であったので、自分はこの日午後一通りの接触時刻観測などやった後は、来観した学校生徒たちに日食を見せたのみに止まった。

その夜も晴れたので幾枚からの彗星写真を撮った。そして 23 時 30 分から南天の蝎座へカメラを向け、序に小遊星セレスと土星との見えてゐるあたりの星野を約 30 分間にわたって撮影した。すると、この撮影中、正に 23 時 51 分という時刻に、望遠鏡の筒先きの方向に当って、何者かが突然として大きい松明らしい火炎を燃した。自分は勿論、側にゐた番人たちも非常に驚いた。確かに之は誰かのいたづらだと思ひ、自分は大声で“誰だ？！”と叫んだ。ところが何の反応も無い、よく考へて見ると、それは満月の十倍も明るい一大流星であった。そこで自分は気を落ち付けて、カメラを閉ぢ、暗室に持ち込んで乾板を現像した所、乾板の正に中央部へ太い一文字の流星痕がうつってゐた。よく調べて見たらこれこそはキンネケ星から来た典型的な流星で、又と得難い収穫であった。（山本一清）

（『星と空』第 2 号、1954 年 1，2，3 月）

あの頃の思い出（２）

私の初めての天体観望

思いめぐらせば、私も先輩の多くが亡くなって了って、いつのまにか年をとったものである。この頃よく人から聞かれることは、どんな事情から天文学者になったのかという質問である。しかしそんなことは私自身にも判らぬ。私の家は代々医者なので、若い頃には両親や祖父母などからも医者になれとすゝめられたものであるが、それでゐて、私の父などは知らず知らずのうちに私に天文の趣味を植え付けたもののようである。

過去六十余年の間に、人に比べて私は割り合い早くから多くの天文現象を見てゐる。天文と限らず、宇宙現象と云われるものの中で、私の記憶にあざやかに残ってゐるものは、1891 年 10 月の美濃尾張の大地震であった。

天文関係で最初のものは 1896 年 8 月 9 日の日本で見えた皆既日食であった。大きくなって、その頃の記録や報告などを読んで見ると、シベリヤの大陸から日本の北海道北岸を横断した皆既日食線上には日本の学者のみならず、諸外国からも多くの学者がやって来て、観測陣を布いた模様であるが、滋賀県の片田舎にゐた一少年としての私にはそんな事は何も知らなかった。しかし、やはり新聞などにはこの日食の予報記事が賑やかに載ったものと見えて、父は其の日の来るのを待ってゐたらしい。当時、私の一家族は琵琶湖岸の小さい村に住んでゐたが、空はよく晴れたので父や母や隣り近所の子供たちと盆に水をたたえ、それに太陽の像をうつして欠けて行く食を見た。当時はこれよりほかにどうする方法もなかったらしい。北海道は曇ったらしいが、滋賀県はよく晴れてゐたことは今の私の記憶にもある。

この後、第二回の天体観望は 1899 年 11 月中旬の獅子座流星群の待望であった。この時は私は小学校の（当時の）高等一学年で、いくらか世間の新聞ニウス記事のことも知ってゐた。獅子座という星座がどれであるのかを知らなかったが、天から沢山の流れ星が降って来るという噂は数日前から知ってゐた。新しいこと珍しいことを見逃さない父もこの事件を大に期待してゐたようだった。いよいよ 11 月の中頃になると、父と私とは毎夜 2 時 3 時頃眼をさまして、南側の雨戸を開け、可なり長い間二人で空を見つめた。“アッ、飛んだ!!”と言って父子が互いに顔を見合すだけで、ほかに何もしなかったが、それでも天来の驚異を楽んだのは事実であった。それから十数年たってから後、一般の天文書で流星の記事を読んだ時、1899 年の獅子座流星群は 1866 年や 1833 年の時のように盛んな出現ではなかったと書いてあった。或はさうだったのであろう。しかし、何の専門知識も有たない一小学生としての私が父と共に空を幾夜か仰いで実感したことから思い起して見ると、流星は皆揃って西の方へ沢山飛んだような気がする。少なくとも当時の新聞で予告してゐたのに該当する流星現象が現はれて、吾々を一応満足せしめたことだけは確かである。かりに、それはその当時の天文学者を満足せしめる程の大流星雨ではなかったのかも知れないけれど。

（山本一清）　　（『星と空』第 3 号、1954 年 4 月）

あの頃の思い出（３）

最初の渡米の頃

私が初めて渡米したのは1922年の秋だった。その年9月11日英子と共に京都を出発し、同14日横浜から富山丸で出帆、しごくのんびりした船旅で、10月1日シヤトル着、行く先きはシカゴなのだが、大陸の奥の方なので、太平洋岸のあちらこちら天文台だけでもこの辺りに沢山あるので一通りそれらを見学してから、多少目を肥やして目的のヤーキス天文台へ行けば宜いと、今ならば考へるべきであるのに、どうしたことか、一日も早く目的地へ到着したい気持ちで一ぱいであった。それで、10日4日にギクトリアの天文台を参観した以外は、何も見学せず、一目散にシカゴへ汽車で走った。

10月12日シカゴ着、宿に着くなり島津氏の助言で、ヤーキス天文台へ電報をうち、日本より安着したことを知らせた。すると翌朝、ヤーキス天文台長フロスト博士から宿へ電話がかかって来た。まだ着米早々でもあり、英語で電話などかけたことがないので、少々まごついたが、思いきって受話器をとって見た。するとゆっくりと明瞭な声で

『私はフロストです。電報を見ました！今日すぐ天文台へ御出でなさい。汽車は午後 3 時45分シカゴの北西鉄道のユニオン停車場を立つのがあるから、5時55分ヰリヤムス・ベイ駅に着きなさい！』

どうも話しが早い、まだシカゴ市内を少しは見物したい所もあるのだが、しかし折角台長じきじきの言葉であるし、とにかくおすゝめの通りその汽車で行くと決めた。

ヤーキス天文台と言へば、当時も今も世界一の大望遠鏡のある天文台だ。こんな偉大な天文台へ世界のいなかの日本からいきなり留学するというのも大胆な話しであるが、フロスト氏からは二、三度今までに手紙も頂いてゐるし、ヤーキス天文台へ行けば、バーナードとか、パーカーストなどといふ有名な人々にも会える。それに、台長フロスト博士などは当時の私の目にはガリレオやケプラの如き偉大なる学者と見えてゐたのだから、日本流に言へば、こんな偉い人々と直接に電話で話しをするだけでも私にとっては大きな感激であった。『米国という所はこんな民主的な所なのだ』と、始めから、私には夢のやうだった。

汽車は予定の如くベイ駅に着いた。ローカル線の終点なので、下車する人は皆この寒村の人ばかり、吾々も二つ三つ荷物を持って車から降りた所、あちらから盲目の一老人が老女に手を引かれながら近づいて来る。そして手をさし伸べて『ミスタ　ヤマモトか？』と聞かれる。これがフロスト夫妻だったのだ。

すぐ自用車に乗せられ、フロスト氏の息ベン君の運転で天文台に案内される。宿はヴンビースブルック氏に頼んであるが、とにかく遠い日本からはるばるやって来たのだから、先づドームを外からでも見せて上げようと思いやりの深い言葉そのまゝ深い感銘を受けた。うす暗がりの空に浮ぶ世界一の大ドームのシルエットはまことに印象的だった。

ヴンビースブルック教授！この人の名も以前から知ってゐた。第一回大戦中にベルギーから亡命して来た人で、『大きい望遠鏡が使いたい』との念願で、ヤーキスへ来られたので

あるという。同氏一家はまだ英語も上達せず、家中では専らフランス語を用ゐてゐた。ロシヤから亡命して来たオトー・ストルーベ君もこのヴンビー家の世話になって居り、約一ヶ年間これらの者たちが一家族としての生活を経験したのだった。　（山本一清）

（『星と空』第4号、1954年5月）

あの頃の思い出（４）
鷲座新星の発見

1918 年 6 月 8 日には日本から太平洋を越えてアメリカまでわたる皆既日食があった。アメリカでは前景気からして大さわぎだったらしいが、日本では本州では何も見えず、八丈島から更に南へ下った鳥島で日出直後に皆既食が見える筈になってゐたので、京都大学から観測に出かけることになった。すると東京天文台からも同行させてくれと申込んで来たので、一所に行くことにした。京都からは自分のほかに、Ｕ、Ｓ、Ｒ、Ｘ、Ｙの 5 君、東京からはＨ、Ｋの２君、それに京都の地球物理のＳｈ教授も同行することになった。かなり賑やかな一行である。6 月 3 日に横浜から 200 トンばかりの小さな汽船で出帆し、5 日に鳥島に着き、日も無いので、直ぐ其の日から土地を選んで器械の据え付けにかかった。据え付けが終ったのが 7 日で、調節など充分に出来てゐないうちに日食の日が来て了った。食は水平線から太陽が昇ると、幾分以内に始まった。ところが、天頂には雲は無いが、ちょうど日の出の東の低い空には薄い雲があって心配した。皆既の始まる頃までには雲は消えるかと空頼みしたが、それはダメで、とうとう雲に引っかかったまゝ皆既になって了った！刻々欠けて行く太陽は雲を透して見えてゐるのだが、待望のコロナは見えない。止むを得ないから、只お土産に部分食の写真など十枚ばかり撮っただけで終った。“それでも、こゝで日食が起こったことだけは見届けた”と言ったりしてお互いに笑ったことであった。

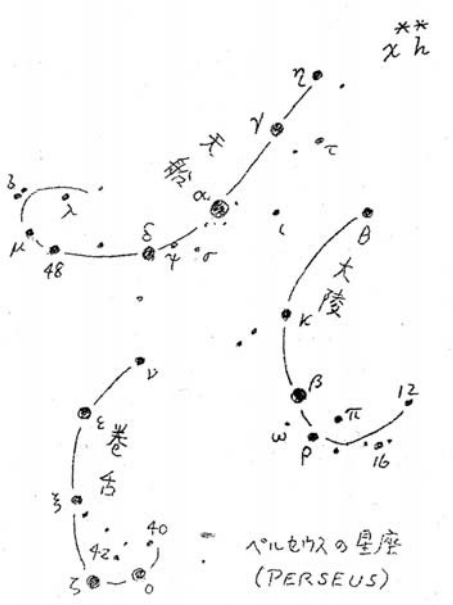
日食はで目だったけれど、ここで日食関係の何等かの仕事をしたのだから念のために思って其の日（8 日）の暮れるのを待って、地点の経緯度の観測をした。ところが朝の東の空が曇っただけで、其の一日中晴れてゐたのに、日の暮れる頃から乱雲が現はれ、風も可なり強くなり、何だかおだやかならぬ空模様である。しかし 10 日にはこの孤島へ迎えの船が来る筈なので、多少無理をしてでも今夜中に観測をやって了はねばならぬ。環径 20ｃｍの経緯儀を以て何でも宜いから見える星を観測しようと務めた。観測は自分がやり、Ｕ君が記録がかりである。ところが、何としても雲が退かない。―――ハラハラするうちに子午線あたりの雲の切れ間から可なり明るい星が一つ見える。すぐ其の星に器械を向けて観測し、さて其の星の名を記録しようとして空を見上げると、空は一帯に雲が切れて来て、牽牛や織女や、デネブや何やかやなじみの星々が見えて来た。そこで今観測したばかりの星を見直すと、それは一等級の否超一等級の光を輝かせてゐるが、ツイぞ見慣れぬ星である。“あれ、あんな所に一等星は無い筈だ！”と、眼をこすりながらよく見れば見るほど不思議な星だ。光は純白色だが“これは新星に違いない!!”新星だ、一等級の新星だということになり、それから休息してゐたＨ、Ｓ、Ｒ、Ｋの諸君、Ｓｈ教授も呼んで来て、一同この新星を確認し、夜更けまで眠られず、と言って、他に何も観測器械も無いから光度の目測だけを繰り返した。しかし鳥島には通信機関は全く無いから、この発見を通知する方法が無い。地段駄ををふみながら、荷物をまとめ、10 日迎えに来た船に乗り込んだ。その翌日船は八丈島に寄港した。そこで、桟橋に着くなり、自分はＵ君と二人で郵便局へ２ｋｍの

途を駈け出した。そして局で、京都大学へ可なり長い電報を打った。それからその翌 12 日船は横浜に着いた、着くとそこには大勢の新聞記者が押しかけて来て新星発見の詳しい事情を聞くのだった。この新星は米国方面でも日食観測値で幾人もの人が発見した。発見日は皆 6 月 8 日だった。(山本一清)

(『星と空』第 5 号、1954 年 6 月)

あの頃の思い出（５）

跳るペルセウス



1922 年（大正 11 年）14 日、それは初めての渡米の船旅で、富山丸に身を託し横浜を出帆した日であった。午後の日の傾く間に東京湾口を出たので、左右両岸に見える相州や房州の山々に別れを告げるかの如く、日の暮れるまで景色を見守ったが、日没と同時に船室に戻り、更に食堂で最初の晩餐を取った。その頃から船は大洋に乗り出したので、今まで比較的おだやかだった船体も大きくゆれ出した。一旦はベッドに入ったものの、これが故国の見収めと思ったので、九時過ぎ今一度起きて船室からデッキに出て、左舷に犬吠岬の灯台の火を見た。

船は東北をさし、暗夜をついて走ってゐる。幸い空はくまなく晴れてゐる。もはや波の向こうに漁火さえ見えなくなり、日本の本土と縁が切れて了った感じであったが、しかし天空には十数年来見慣れた多くの星座が現れてゐて、自分と共に海を渡るのかと思わせられる。

ふと行く手の空を見上げると、まっすぐにそゝり立つ天の河と共にきらびやかなペルセウスの星座がその全容を現はして居り、風や波のまにまに船がゆれるにつれ、左右に或は上下にこの星座全体がゆれる様子はあたかも生きものの如くで、実に壮大雄壮であった。ペルセウス座は東西 20° 南北 30° を占める天空で、一等星こそ無いが、二等、三等の星々夥しく、まことに賑やかな配列を示してゐる。それはそれだけで美しい。ところが、2000 年来のシナ天文学ではこの全域が天船、大陵、巻舌の三つの星列に分けられ、それぞれ幽雅なカーヴをなしてゐる。あたかも天女の羽衣が舞う風情である。天船は左の袖、大陵は右の袖、巻舌は裾を表はす流線である。普通これらを地上で見る場合には、一幅の大きい画の如く静的な図形に、只個々の星のまたたきのみが吾々に話しかけるようであるが、大きくゆれる洋上の船橋から見ると、この星々の天女の姿は実に美しく、動的に跳る印象を与へられる。それはいつまでも忘れない壮麗な眺めであった。その後三十数年間、海陸の旅行を幾度も経験したけれど、あの晩のような跳るペルセウスの印象は再び得られなかった。（山本一清）　　（『星と空』第 6 号、1954 年 7 月）

あの頃の思い出（６）

水沢の二年間

自分が若い頃、満二年間も岩手県の水沢に居たということは今の緯度観測所員たちも、殆ど知らない昔話である。それは 1914 年 5 月から 1916 年 5 月までであった。今年（1954 年）四月からは水沢市ということになったが、40 年前の水沢町はまことに淋しい東北の片田舎であった。

水沢に緯度観測所という国際的な一天文台が作られたのは 1899 年で、その年末から観測が始められた。所長は有名な木村栄博士であり、ほかに中野徳郎という若い天文家が居られ、この二人で天体観測を行はれたのだが、自分が水沢へ行った頃には中野氏居られなくなり、その代りに橋元昌　氏が居られ、その他に気象係として大山、鳥畑、佐藤の三氏があり、雑役として土屋、千田の二氏が居た。今はこれらの人々のうち木村、大山、鳥畑、土屋の四氏はなくなり、橋元氏は東京に退陰され、佐藤、千田の両君だけが尚水沢に働いて居られることと思う。

自分は 1912 年に一度水沢を訪ねたことがあるけれど、今度半ば永住の準備をして新婚の英子と共に京都からやって来たのだった。当時の観測所は本部の外には天頂儀室と、官舎二棟とだけで、敷地もせまく、田舎の役場然とした所であった。自分は正門の直ぐ隣りの最小の一家屋を改造して貰って住み込んだが、言はゞ世界最小の住宅だったろう。

自分は学士院嘱託という身分で、緯度観測と気象との関係を研究するのだったが、毎夜国際観測と全く同じプログラムで眼視的に測微観測をやった。京都とは気候が全く違うので、夏の暑さは楽であったが、冬は意外に厳しく、殊に 1914－1915 年の冬には 3－4 尺の雪が積ったまゝだったので驚いた。毎夜の観測は独りでないので、割り合いに愉快で、午前 2－3 時頃まで疲れもせず行ったが、一番困ったのは曇りが多いことであった。“今夜は大丈夫晴れないだろう”と見込みをつけて、夕食後ふらふらと町の友人宅へ遊びに行き、急に晴れたので、大急ぎ観測室に帰って来て、木村所長から“当番の日はよそに遊びに行くものではない”と叱られたこともあった。

自分は京都大学の物理科を卒業したので、天文学はむしろ独学であった。それで天文学上の素養には多少の凸凹があった。それを一定の基準に導いて貰ったのは、この水沢時台の木村、橋元両先輩の御かげであった。当時天体物理学はまだ若くて標準書一つも無い時代であった。従って水沢の天文学的な研究はアストロメトリの主要部と直結するものであり、それだけ自分には身にこたえた。

二ヶ年も住んでゐたため、水沢の町の人々には友人が沢山できた。中には生涯を誓うと言ったような親友、盟友も与へられた。東北弁にも親しみ（自分で語ることは出来ないが）今でも汽車の乗り合いやラヂオ放送の中に東北弁を聞くと、一種のなつかしさを覚える。

木村博士は 1943 年に亡くなるまで、水沢に居られたが、その間に観測所は人的にも物的にも拡張され、今ではほとんど四五十人を擁する研究所となり、研究設備も幾倍に増した。

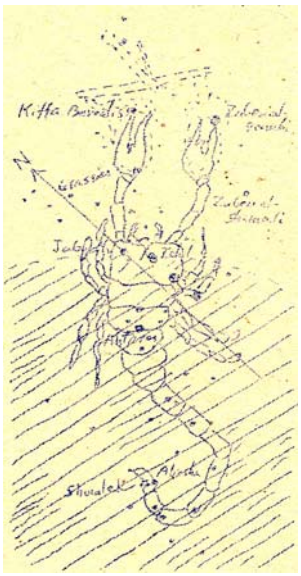
最近には気象や地震報告の外に、天文研究部門の Publication が発表されるように発展しつゝあるのを見て、自分のことのようにうれしい。　（山本一清）

（『星と空』第7号、1954年8月）

あの頃の思い出（7）

センチュリ大辞書をなつかしむ

自分は小学校生徒の頃から漸次に星に親しむようになったけれど、田舎に住むことであり、時代も明治の三十年代で、書物や図など何一つ有たなかった。ところが、或る年（それは高等学校に入った年だったと思うが）隣りの街の高等小学校の校長さんを訪ねた。夏休み中だったので、ひまにまかせてその室内の書棚をあさるうちに、大型 10 冊揃い The Century Dictionary を見つけた。ロンドン・タイムス社出版の百科全書だったが、この書の頁を開いて行くうち、有名な星座の一つづつの凸版図と説明文があり、又この辞書の第 10 冊目の地図集には南北両半球別々に６等星までを含む立派な星図があった。これは自分には大発見であり、大変な喜びであった。その翌日からは毎日その校長室に出かけて、個々の星座と絵模様を写し取り、又遂には大きい星図をそっくり写し取る決心をして、コンパスと定規と絵の具とを持って学校へ通った。この仕事には夏休みの大部分約一ヶ月を費した。しかし、それは一日一日が楽しみであり、喜びであり、発明であり、発見であった。“どうしても休暇が終るまでに！”かたく決心して勤め励んだ。暑さも空腹も問題ではなかった。とうとうこの大事業は終った。元々図を画くことは好きだったので、案外良い図がかけた――――それから後、この大きい標準星図はいつまでも自分の側を離れなかった。大学を卒業しても、水沢の天文台に移っても、京都に帰っても、大学教授になっても、花山時代にも、田上に引っ越しても、いつもこの星図は自室の壁に掲げた（さすがに外国留学中は持ち歩かなかったが）。ところが、こんどの大戦争になって間もない或る日、大津市の或る古本屋を訪ねた所、時局がら店を片づけると言って、主人はいろんな書物を投げ売り的に置いて居た。自分の顔を見るなり、主人は“この辞書を買って下さい”と言う。見ると、それは少しも破損の無い立派なセンチュリ大辞書だった。自分には思い出の深い書物である。値段は 200 円だと言う。当時の 200 円は今の 5 万円にも当たるものだったが、自分は思い切って買って了った。そして、娘時子と二人で二台の自転車で運んだ。余りに重くて途中の悪路上で一度転倒したが、それでもうれしい記憶であった。それ以来この大辞書は田上の書架を飾ってゐる。半世紀も前の本であるが、今でも有益な記事はあるし、殊に星座の記事はすたらない。ほしいと思っていた本が 40 年ぶりに得られた喜びであった。自分が書いた星図の方は、戦争中にどこかへしまい込んだものやら、目下行方不明であるが。



ここに画いたのは、このセンチュリ大辞書の中にある、さそり座の画である。上部には天秤座も点線で画いてある。

（『星と空』第 8 号、1954 年 9 月）

あの頃の思い出（8）

フィンレイ・佐々木彗星の発見の頃

1919 年というと京都大学には口径 18cm のザルトリウス機と 10cm のハイデ機とがあったけれど、「天文学教室」という名称も何も無い初期の時代であった。新城講座で、百済教猷君と佐々木哲夫君と筆者と只の三人が仲よく勉強してゐた時代である。今から考えて見るとまことに夢みる心地のする楽しい時代であった。秋晴れの天気が続いたので、自分は 10 月中旬頃東京の河合章二郎君から送られて来たショウマス彗星の予報をたよりにして捜索や写真観測をしてゐたが、これに促されて、佐々木君も新彗星の捜索に着手し、首尾よく 19 日夕刻に乙女座でプロルゼン・メトカーフ彗星を見つけ、それから百済君も自分も手伝って毎暗夜これを観測した。

越えて 10 月 26 日 22 時頃佐々木君が突然として宅へやって来た。“何だか新彗星らしいものを見つけました”と言う。詳しく聞いて見ると、実は 25 日 8 時頃佐々木君が暇にまかせて夕空の山羊座を 10cm 機でスキープしてゐた時、β星のはるか南方に 9 等級の星霧状天体を見つけ、幸い同室してゐた百済君もそれを確かめたという。しかし、詳しい星図をしらべて見た所、そのあたりに既知の星霧が一つあったので、そのままにしておいた。ところが、その翌 26 日天空捜索の序でに佐々木君は前夜の空を見た所、星霧状のものが多少東へ移動してゐたので、大に驚き、その星野の詳しいスケッチなど作って、後研究室のあちらこちらさがしたが、百済君も山本も、もはや帰宅して了った後だったので、あとを追いかけて、自分の宅へ佐々木君がやって来たのであった。時計を見ると既に山羊座は西へ没して了った時刻なので、「なぜもっと早く知らせてくれなかったのか」とグチを言って見たけれど、あとの祭りであった。

27 日は研究室で三人がいろいろ話し合って見たけれど、その夜は曇りでもあって、気はせくが、何とも致し方が無い。東京天文台では電報で知らせておいた。28 日には雲の間からチラッと見た。29 日はよく晴れたので、三人で確実に彗星を捕へた。そこで 30 日には海外へも知らせようと考へたけれど、何しろ幼稚な時代で暗号電報の打ち方もわからず、それに教室には外電を打つだけの予算が無い。当時恰も新城教授は外遊中だったので、止むを得ず自分は学部長大幸教授に頼み込んで理学部の臨時費から 120 円ばかり支出して貰って、コペンハーゲンとハーバードとえ電報を打った。電文は暗号でなく、

Comet Sasaki October twenty-fifth eight oclock right acsension twenty
Hours sixteen minutes declination twenty-six degrees, south ...

という風であったから、二通で 100 円以上の大金を払ったのも無理は無い。

東京へも二度目の電報を打った。こんなことで 30 日はバタバタと忙しくしてゐた。ちょうどこの日は京都大学の創立記念日で、自分は朝から式に列するためフロックコートを着て出て来てゐたのだが、理学部長室や、事務室や、京都の中央電信局などの間を往復交渉して奔走してゐたので、遂に式には出られなかった。

可なり長い間海外からは何の反応も無かった。只東京からは神田茂氏が佐々木彗星はフィンレイ彗星の再来であると言って来た。よほど経って外国からも、この同定が確認され、以後これはササキ・フィンレイ彗星という風に多少異例の名で呼ばれることになった。

佐々木君は自分が水沢にゐた頃からよく訪ねて来た岩手県の熱心な好青年であったが、1920 年の夏から病気となり、1921 年 2 月に郷里で永眠した。惜しい人であった。しかし、その存在はササキ彗星の発見によって、永久に残されることとなったのであった。田上天文台には今も佐々木君手製の六分儀が一つ残ってゐる。

（『星と空』第 9 号、1954 年 10 月）

あの頃の思い出（９）

ペライン彗星の失踪であきらめられない気持ち

1922 年 10 月 18 日ヤーキス天文台に着いて、まもなく観測生活に入った。当時はヤーキスの台員が少なかったので手の空いてゐる機械をいろいろ使った。始めは四十吋は遠慮したけれど、十二吋も、廿四吋も、ブルース・カメラも比較的自由に使った。———すると、その年の十二月 4 日ハーバード天文台から電報が２つ入った。一つは琴座新星の発見、今一つは日本のナカムラ氏が彗星を発見したとの知らせである。勿論これは自分の故郷京都大学の中村要君が発見したものに違いない。“日本人の彗星発見だ”というので、フロスト台長始め皆々喜んでくれる。ところが、その彗星の名が Herrin となってゐるので、不審に思い、電報局に聞き合わせて見たが、星の名に誤りは無いというしかし、星の位置や光度は確かめられた。即ち、星座は小犬座の東端をを南下してゐる。光度は 13 等で、バンビー氏も観測をやるべきかどうか迷ってゐる。自分はこれをペライン彗星の再発見と思ったのだが、ペラインならばロシヤのカサコフが摂動を加算して発表した位置予報と比べて位置が 180° も違ってゐると言って、バンビー氏は怪しんでゐる。夜になって、一同は先づ琴座の新星を探したが、どうしても見つからない。とうとうしまいには“今の天文電報は何だか信用できない”というようなことに、なって了った。それから一週間もたって、自分は天文台の図書室に B.A.A.の今年度のハンドブクを見つけ、その中にペライン彗星の簡単な位置予報が載ってゐるのを知った。これと比べると、さきの中村彗星の位置とよく合ってゐる。そこで中村君はこの予報のヒントによって 11 月 30 日にペラインを発見したものに違いないと考へ、すぐバーナード氏とバンビー氏とに其の意見を話した所、こゝで二人の先輩も完全に了解し、それからおそまきながら天文台は活気付いて来た。すぐ其の夜から自分はブルース機で此の彗星の捜索を始めることとし、若し見つかればバンビー氏は其の夜のうちにでも 24 吋機で撮影する手筈にした。ところが、何分にも初発見から 2 週間もたってゐるので、この捜索は困難を極め、幾枚もの広い星野写真を立体比較器で測って見ても成功しなかった。その後、2 月 6 日バーナード氏の死という事があり、彗星のことは誰も忘れた恰好になった。ところが 2 月 8 日に中村君から手紙が到着し、中にかの彗星のスケッチが記入してあったので、それを国際写真星図と比較して、正確な経緯度を算出し、それから取りあえず軌道要素を計算して見た。その結果は下の通りであるかが、これを参考のため B.A.A.ハンドブクの要素や、カサコフのものと比較して見る。

	近日点通過(GMT)	引数	昇交点	傾斜	近日距離	分点年	軌道
中村星	1922 年 11 月 1.9 日	175° 7′	239° 54′	16° 33′	0.0746	1922 年	パラボラ
BAA	“ 10 月 7.1	169 49	237 58	17 41	0.0924	“	楕円
カサコフ	“ 12 月 25.2	167 15	242 19	15 43	0.0795	“	“

こんなわけで、可なりよく一致してゐる。そこで、すぐさま中村君の所へ手紙をかき、こゝに改めてこれがペライン彗星に違いないことを申し送り、祝辞を呈したのであった。

こんないきさつで、一応事件は落着したものの、ヤーキス天文台に於ける大小いろいろの機械によるこの星の捜索が悉く失敗に終り、又ほかの天文台でも誰一人この中村彗星を確認せずという有様なので、自分は上記の計算を納得し得ないので、再び軌道計算を検算し直した結果、自分の計算には重大な誤りがあることが判明し、大に落胆したのであった。それにしても、間違いにも拘らず、最後の結果が一応上記の如く他の結果と極めてよく一致したのは奇中の奇と言はねばならぬ。こんな事情で、ペライン彗星は半永久に取り逃して了ったことになったのは誠にあと味の悪いことである。（山本）

（『星と空』第 10 号、1954 年 10 月）

あの頃の思い出（10）

ヘンリ・ノリス・ラッセル教授のこと

米国の東部、ニュージャジ州の片田舎にプリンストンという小さい大学町があります。人口は 7000 人ばかりの町ですが、ほかに大学の職員や学生が 5000 人ほどあり、又何かの催しがあると、他から 2〜3 万人の人が集まります。ニューヨークからもフィラデルフィヤからも 50 マイルばかりの距離にあって、アメリカ文化の中心地帯であり、現在は有名な高等数学研究所があり、アインスタインやオッペンハイマ等の学者たちが居住してゐます。この大学には天文台があって、十九世紀末から二十世紀初めにはチャルス・オーガスタス・ヤングという太陽の専門家がゐました。ヤングは元ダートマス大学の天文学教授であった人ですが、1870 年代にプリンストンに招かれたのでした。

私が初めてアメリカへ留学した 1920 年頃はヤングの後継者としてヘンリ・ノリス・ラッセル教授がこの大学の天文学の主任者で、天文台長でした。この人は先任者ヤングの高弟でしたが、太陽よりも恒星系の専門家であり、後にハーバード大学天文台長となったシャプリの先生でした。1913 年にこのラッセルは恒星の光力とスペクトルとの関係を統計的に求めて、所謂ラッセル図というものを考案し、ドイツのヘルツシュプルング博士と共に巨星矮星級を提唱した人です。1920 年代はこのラッセル教授の声望が最も盛んな時代で、日常多くの論文を発表し、又学会があると必ず出席して、他人の論文にも屡々批評を加へ、言わばアメリカ天文学界の大御所の如く、又はロマ法王の如き権威を振ってゐました。私は京都大学に居た 1918 年頃からこのラッセル教授と文通し、又私の新星爆発説を最も早く推賞してくれた人で、渡米以前から親しみを感じてゐた人でした。

私が初めて直接にラッセル教授に会ったのは 1922 年の末、ボストンで開かれたアメリカ天文学会の総会でした。それから 1923 年 9 月パサデナに於ける学会にも、同年末ハザー女子大学で開かれた学会にも、又 1924 年の夏ニウハンプシャ州のダートマス大学で開かれた学会でも一所でした。大きい声で話しする人で、一寸威圧されるようにも感じましたが、個人的には非常に親切で、慈父の如き感を覚えました。天文学者としてのみならず、熱信なクリスチャンとしても有名で、氏は日曜日に屡々教会の講壇で説教をすることが多くの人々の評判になってゐました。

1924 年の夏、私は２ヶ年間の滞米を終って、９月にはヨーロパに渡る予定でありましたので、ボストンからフィラデルフィヤ、ワシントン等の各地を巡遊する以前に、特にプリンストン大学を訪ねてラッセル教授に御目にかゝることを楽しみにしてゐました。それで、かねてから同氏に手紙を送って都合を打ち合わせたのでしたが、その度毎に真情溢れる返事を貰い感激したのでした。ところが、ハーバード天文台の研究の仕事が予想外に日時を要し、幾度も幾度もプリンストン往訪の日時を変更することになりましたが、ラッセル教授は決して私の度々の改約に感情を損することもなく、いつでも変わらぬ親切を極めた歓迎や激励の手紙が来ました――私は此の様なラッセル教授からの手紙によって、真に行

き届いた手紙の書き方を学びました。

1933 年にも、1937 年にも 1938 年にも私は渡米しまさいたが、ラッセル教授に会ったのは 1933 年が最後でした。氏は今尚プリンストンに健在ですが、77 歳の老齢で、先年退職されてからは常に学界にも出られないようです。1947 年に氏はトウガン氏等と共著の“天文学書”を贈られましたが、それを邦訳する機を失ったことは、同氏に対する私のおいめとなってゐます。(山本)

(『星と空』第 11 号、1954 年 12 月)

あの頃の思い出（11）

日本各地で地球の引力を測る

ほぼ半世紀にわたる天文学究生活の思い出の中には、いくらでも話題はありますが、比較的近年の田上天文台創立以来のことは余り身辺に近すぎるので、あとまわしとし、今暫くやはり古い時代の事を主として語りませう――

私はまだ大学を卒業しない学生時代から、先輩や同僚たちと共に日本全国の各地へ出張して、重力観測事業に参加しました。最初の年は 1911 年で、約 1 週間京都大学で標準観測をした後、7 月 21 日に同行 4 人で出発し、高知県高知、同県中村町、佐賀県唐津市、熊本県人吉町、岐阜県高山町、同県中津川町、和歌山県新宮町の順に旅行し、9 月 7 日京都に帰着、15 日に標準観測終了。

翌 1912 年は 6 月 21 日より標準観測をなし、7 月 1 日京都出発、同 4 日東京大学で再度の標準観測をし、同 10 日上野駅発、岩手県遠野町、北海道札幌、室蘭、旭川、帯広、森野、函館、岩手県宮古、宮城県気仙沼の順路で観測をやり、東京を経て、9 月 4 日京都に帰着。

次いで 1913 年には 8 月 7 日京都で標準観測を始め、同 17 日出発、山形県酒田、北海道名寄、網走、釧路、根室、浦河の順で観測を行い、10 月 3 日に京都に帰った。

こうして、京都と東京の両大学に於ける標準観測を除き、3 年間に九州の人吉から、北海道の根室まで合計 22 か所をまわったのでした。一体、この重力観測というのは文部省測地学委員会の事業で、1884 年頃から田中館、長岡両博士などが主として全国的に行われたものでしたが、1910 年頃からは重に京都大学の関係者が参加しました。この頃は、全国の観測網がほぼ終了し、私が参加した 1911 - 1913 年頃は前年にいろんな都合で残されていた観測点のみを飛び飛びに旅行しましたので、上記の如く甚だ無理な旅程で、往復したのでした。しかしながら、若い頃に学術上の責任を負って遠く旅行した間には、深い印象を得た所も多く、40 年以上も経た現在、尚忘れられないものが多々あります。高知から中村へ向う途中で、風雨に会い、難船しかけたこと、中津川から高山まで三泊がけの人力車旅行を往復したこと、遠野で長く雨天になやまされ星が見えないでウンザリしたこと、室蘭で観測期間中に明治天皇が崩御と、その直前のセンセイショナルニウスを公電私電で受けたこと、釧路から根室まで、汽車の無い時代でしたから、小さい汽船で往復し、その船中で風になやまされたり、月食を見たりしたこと等々。今尚手元にある当時の日記を開けて見ると、古い記憶がよみがって来ます。

重力の観測は各地に急設した暗室内で標準振子の周期を精密に測定するのですが、この時に使用する標準時計の歩度をその土地で天体観測によって決定するのです。今ならばラジオ時報によって百分の一秒まで時刻が簡単に得られるのですが、明治の末の頃はそんな時代ではなかったのです。酒田へ行く途中、山形から初めて自動車というものに乗りましたが、これは京都に帰ってからでも自慢のたねでした。（山本）

（『星と空』第 12 号、1955 年 1 月）

あの頃の思い出（12）

花山天文台創立の前後

京都に花山天文台が出来てから早くも 25 年、四半世紀も経つ。実に速いものだ。私は 1913－1914 年の頃大学を卒業して、水沢へ赴任するまでの数ヶ月新婚の小さい家庭を京都の岡崎公園の一隅に有った。家は豪商中井三郎兵衛氏の借家で、妻は毎月その家主へ家賃を有って行った。そして

中井氏や同家の番頭服部仁三郎氏と漸次懇意になった。それから十幾年、各地への転居や外遊など多忙であったが、1927 年頃京都大学では天文台を設立する計画で、予算を文部省に請求し、最初から吉田山を敷地に定め、一応の測量などしたのだったが、あの風致地区が殺風景なドームで醜くなるという理由で市役所から反対され、頓挫を来した。この事が新聞に出た数日後、上記の服部氏が突然として大学の私の研究室を訪ねて来られて、中井氏の所有である東山裏の“花山山”を天文台の敷地として寄付するという中井氏の厚意を伝えられた。大学では荒木総長や、新城教授等と熟議の上、この寄付を喜んで受納することに決し、1928 年度から地積の測定や開拓をおこない、たまたま伏見の工兵隊の実地演習が行われた機に、新しい登山道路が作られた。そして大学の営繕課の設計により当時としては可なりモダンな建築図案が出来上り、まもなく工事が始まった。山上に水の便が無いので、建築工事の最初から困難が予想されたが、幸いに、近くの谷間に多少の流水が見つかったので、難関は漸く切り抜け、1929 年の春の頃には本館の全貌がほぼ出来上がった。この天文台は私の担当する第二講座で運営する筈であったから、この建築工事中は週に何回となく登山して工事の進展を監督した。ところが、一方に於いて 1929 年 5 月に南洋方面に皆既日食があり、第二講座ではスマトラ島へ観測に出かける準備もしてゐたので、一時は全く忙殺された。遠征に出たのは 1929 年 3 月下旬であり、5 月 9 日が日蝕で、その後引き続きジャワで開かれた太平洋学術会議に出席の要務も兼ねてゐたため、京都に帰着したのは 7 月初めであった。それから、かねての計画通り、花山の空地に別館と子午線館と合宿所との工事を進め、又教室から望遠鏡や諸器械、図書の類の移転運搬などで、夏休み中も働き続けた。そして、同年 10 月 17 日には首尾よく落成式を挙げたのであった。私は外遊中に欧米各地の七八十ヶ所の天文台を見てまわったことがあるので、花山天文台の建築や設備には多少自信を有ってゐたが、しかし主要機械が口径 30cm の屈折赤道儀というのでは全く自慢にもならなかった。只、太陽館には径 40cm のシーロスタットと 5cm スリットの分光太陽写真儀を据え、子午儀室には径 10cm のバンベルヒ機とレヨルト自由時計とを置き、尚自有の径 46cm カルヴァ反射機を並置して、内容の充実に資した。

天文台は出来たけれど、官制も無く、経常費も無い、すべてを講座費で賄う外は無かった。従って私は毎年毎月可なりの私費を注ぎ込んで人件費と研究費にあてた。著述や講演から得た収入が此の天文台の仕事の一部を支えたのだったから、官立天文台としては変なものであった。しかし中村要君を始め、台員諸君はよく働いてくれた。所員遂に十数名

となり、夏期などには遠近からやって来る留学者もあった。

戦争中はこの天文台も荒れたが、近頃花山時代の同僚者の所在も判明したので、今夏には創立以来の関係者が花山に集まって、25 周年の記念会を開いて見たいと考えてゐる。死亡者も幾人かあるが。

花山天文台という名は私が命名したのだが、大学当局では之を用いなかった。何しろ天文台の官制が無いのだから。只、創立当初から一寸気がかりだったことはロシヤに歴史の古い Kazan 天文台というのがある。これと混雑しないために、吾々の方はわざわざ KWASAN という名を用いることにした。これが今日も内外に通用してゐる。私は田上を創立するために、1938 年に花山を辞したけれど、今尚私有の図書や物品が幾らか山の上に残ってゐる。

（『星と空』第 13 号、1955 年 2 月）

あの頃の思い出（13）

処女作の『星座の親しみ』の由来

私がはじめて書いた本は『星座の親しみ』である。実に不思議な機縁によって書いた本が、（自分ながらこんなこと言うのは変だが）とにかくよく読まれた。“あんな本が何故読まれたのだろう”と時々思い返して見るが、今だに判らない。

大正 8 年頃、大新聞「朝日」と「毎日」とが年鑑というものを出版する計画をした。その時、私は毎日新聞から天文に関して何か書いてくれと頼れた。当時、年鑑と呼ぶものは未だ世間に殆んど何もなかったので、果してどんなものが出るのか、見当が付かなかった。とにかく初めてのことであるし、天文の万人向きのものであれば宜しかろうと思って、私は一年四季それぞれに合うような星座風景を書いた。どうせ広い紙面は許されないので、極めて短い――――軽い読みもので、新聞の読者に毒にも薬にもならぬものだった。それを新聞社へ送った所、二、三ヶ月保管してゐたらしいが、とうとう年鑑には向かないと言って返送して来た。やれやれ、くたびれもうけだったと思ったきりで、この星座の原稿が何日、日の眼を見るのか考へもせず、放置しておいた。

すると、大正 10 年の春だったかと思うが、長野県の教育部から講習に来てくれと頼まれた。そこで中村要君を助手に連れ、同志社大学から口径 10 センチのポータブル屈折機を借り出して出掛けて行くことにした。その時、何気なく例の星座の原稿を思い出して、講習員諸君に読ませたら講義の足しになるだろうと思い、出発前近所の弘文堂に頼んで活版印刷して貰った。自分が装禎したもので、8cm×6cm 位な大きさの実にかわいい豆本だった。内容が短いので、こんなにでもしなければページ数が出なかった。200 部だけ自費で刷って、100 部は家に残し、あと 100 部を長野県へ持って行った。そして、上田、長野、松本、諏訪とまわるうち、価 5 銭とかりにして会場の入口に積んでおいた。すると、“これは面白い！”と言って買って行く人があり、最後の諏訪へ着く頃には品切れになって了った。

講習が終わって、家に帰ってから、東京の警醒社の主人の手紙を受け取った。開けて読んで見ると星座の親しみを出版したいと言う。これには私も苦笑したが、どうにでも勝手にして下さいと言ってやった所、大正 11 年頃チャンとした小型本が出来てきた。それから、この本が売れること、売れること！忽ち版を重ねることとなった。重版が進んで行くにつれ、私は何だかくすぐったい気持ちになったが、それにしてもあんな簡単なものでは読者に気の毒だと思い、機を見て内容を増補し前文を加へ、しまいには星図の付録をつけなどして、多少体裁をととのえ、30 銭か 50 銭かの本にした。そしたら益々よく読まれるようになり、とうとうその印税で大正 11 年秋の妻の洋行費が出て了った。どうも、大正から昭和へかけての天文ファンは大ていあの本を少なくとも一度は読んでいるらしい。特にあの前文が良かったらしく、当時の女学校や中学校の教科書の中に取り入れられたのには我ながら驚いた。私は少年時代は悪文家で、その故に理科の大学に入ったのであったのに！

それにしても、今尚私は星座の親しみが広く読まれた広く読まれた理由がわからないの

である。率直に言うと、あの本は散文詩みたいな書き方をしたもので、一通り天文のことを、特に星座のことをあらかじめ知っていなければ、読んでも面白くない筈の本なのだ。それを天文の初歩の人が読むのだから、どうにも納得ができない。読者の心は判らないものだ。

（『星と空』第 14 号、1955 年 3 月号）

あの頃の思い出（14）

自転車に乗り始めた頃

自分が小学校に通った明治30年頃は、田舎で自転車というものが非常に珍しかった。或る日、自転車に乗った一紳士が学校の門前を通り過ぎたので、教師も生徒も皆教室からとび出して、喚声を挙げてそのあとを追ったことを覚えてゐる。それ以来、自分も自転車に乗るのを夢のようにあこがれた。

中学も過ぎ、高校も卒えて、大学に入った二年目、S教授から、京都の上加茂の山の上にある地震計の管理を頼まれた。自分としては天文学が好きなので、地震学をさほど好んでゐたわけではないのだが、山に居る条件として10cmのハイデの赤道儀と20cm環径のザートリウスの経緯儀を自由に使って宜しいと言われたことに釣られて、山上に住み込むことにした。しかし、学生の身分なので、毎日大学の聴講に通わなければならぬのに、今と違って電車もバスも何も無い。通学の距離は、下山してからでも5kmはある。全くの田圃道である。そこで、教授からすすめられて、自転車に乗ることにした。

まづ乗車の稽古である。初めヨチヨチと車から落ちたりするのを人に見られるのが恥ずかしいので、夜間天体観測のあいまあいまに大学の広場で稽古した。当時の自転車は一般に外国なみで、人は皆車輪の直径28インチのものに乗ってゐた。自分は大学門前の一自転車屋から古い車を一台借りて来て、毎夜稽古した。初めは落ちてばかりゐたが、三日目から図書館の小使に助けて貰った。それでも中々遠乗りが出来ず、一週間も車を借りたまゝになった。すると『借り賃がかさむよ』と言って教授にからかわれた。そこで大枚30円を奮発して、とにかく一台買い込んだ。

そのうちに二、三丁くらいは乗れるようになったので、いよいよ大学の門外に出て、上加茂まで行くことにした。当座は人通りも少なかったので、案外愉快に稽古かたがた行った。牛や荷車がやって来ると、用事がありそうにして道端に休んだ。一里半の道を一時間もかかっただろう。しかし、この遠乗りで非常に自信が出来た。それから、毎日上加茂から大学まで通ううちに、どうやら一人前（いや半人前）くらい乗れるようになった。その間にはつい大胆になって、溝に落ち込んだり、牛の横腹にぶち当てて蹴飛ばされたり、さまざまな芸当を演じた。

半年もすると、すっかり得意になり、休日などには郊外へ出たり、たまには逢坂山を越えて、郷里の田上まで往復したりした。それ以降、大正十年頃までは自転車を棄てなかった。水沢に居る間も乗った。又、欧米留学中は乗らなかったし、その後花山天文台に行くようになってからは自転車と縁が切れた。

1939年田上に帰るようになって、又自転車が必要になった。それで、殆んど二十年ぶりに再び乗り始めたが、流石に長く乗らなかったので、こんど新車に乗り始めるのに、二日ほど稽古した。そして驚いた事は、日本人の乗用車がいつのまにか、26インチの標準に変わり、ハンドルやペダルやその他の部分が皆日本人向きになって非常に乗り易くなってゐ

たことであった。

戦争中、汽車が混み出したので、自転車をいよいよ愛用することになり、終戦直後にも京都まで何回か往復した。近年、田舎にもバスが発達したので、又々自転車と縁が遠くなりつつある。しかし、運動のためには、今でも乗る方が健康上好いと思う。日本で初めてカノプス星に注意し出したのは自分であるが、これは全く荒神橋上を往復した自転車通いの賜ものであった。

（『星と空』第 15 号、1955 年 4 月号）

あの頃の思い出（15）

ハーバードの三羽烏

米国のハーバード大学の天文台長ハーロー・シャプリ博士がさきに定年で退職したので、さて誰が後継者となるのだろうかとはるかに遠い日本から興味を以て見てゐた所、ほかならぬドーナルド・トー・メンゼル氏が新台長となったので、早速お祝いの手紙を書いたのだったが、ももなく返事が来て、

“ありがとう・・・ななた方がケンブリヂに居られた頃、おいしい日本食を頂いたことを忘れません・・・”

とあった。

なるほど、古い日記（天界第 42 号第 29 頁）をあけて見ると、こうかいてある：・・・“十二月十八日（火）今日は夕食に日本式のスキヤキして、天文台からライテン、メンゼル両君を招いた。ライテン君は箸の持ち方をどこで覚えたものか、頗る巧みで、日本食が大に気に入ったと見え、飯を四杯も平げた。メンゼル君は之に反し、全くの始めてと見え、一杯の飯を持ちあぐみ、水をコップに四杯も飲んで、すべてを流し込んだ。”

あの時のことを英子も自分もやはり覚えてゐるが、全くおかしいやら、気の毒やらであった。しかし、日記はすぐその次ぎに、

“夜８時から、メンゼル君と同道して、ローエル学院のバーコフ教授の講演「相対論の二三の奇論」を聴きに行く。”

とかいてあるから、我々両人は食後の散歩に仲よくボストンまで行ったものらしい――――これは 1923 年の暮れのことであった。

その頃のハーバードの天文台はシャプリ君が E.C.ピケリングの後をうけて、台長になって三年目という所で、元気一ぱいの活動時機であったが、しかし天文台の内部はミス・カノンやミス・ウヅや其の他婦人の天文学者が二十人も居た割合に男子の方はシャプリと、ライテンと、メンゼルとの三人がひかえて居ただけ（あとにベイリとカンベルと二人の老人が居たが、一寸これは別世界であった。）

シャプリ、ライテン、メンゼルの三人はほゞ同年輩で、皆三十才台の実に仲の好い兄弟みたいな間柄であったが、強いて言へばシャプリ君が長兄、メンゼルが最年少の最も影の淡い存在だった。シャプリはプリンストン大学を出て、ヰルソン山で球状星団を研究し、今の銀河宇宙の構造を初めて見つけた新進学徒で、純粋なヤンキー人であった。ライテンは元々オランダ人で、ジャバで生れたといひ、東洋の空気を多少吸ったこともあり、従って箸の持ち方など、シナ人にでも教えられたのだろう。メンゼルはコロラド生まれで、プリンストン大学を卒業したばかり眉目秀麗の一青年であった。ライテンは其の後、とうとう今日シャプリの後釜に座ったわけ。前のピケリングといひ、シャプリといひ、何れも若くして台長に就任したのだったが、メンゼルの場合は其の伝統を破って 53 歳にして、台長となったわけである。　　（『星と空』第 16 号、1955 年 5 月）

あの頃の思い出（１６）

初めて読んだ天文書

明治の三十年代は今と違って天文の書物は世間に殆どなかった。学校の先生方も星のことなど御存じない方がすべてであった。新聞紙に日月食の記事などが年に一二回載れば好い方で、雑誌などには全く取り扱われなかった。

私が天文書としてお目にかゝった最初は博文館の“百科全書”の中に含まれてゐた佐藤伝蔵氏の“天文伝”で、図版は極めてまづかったが、テキストは可なり読めた。尤も星座のことなどは殆ど何も書いてなかったように思う。それは私の高等学校入学当初であったが、その後同じシリーズの中に一戸直蔵氏の“高等天文学”を見つけ、買って読み出したが、これは読みごたえがあり、又かなり当時難解であった。難解の部を質問しようにも、京都では良い先輩が無かった。

そのうちに、高校（昔の三高）の図書館に日参して、横山又次郎氏の“天文講話”や若干の英書などをあさったが、その中で最も恩恵を受けたのは Charles Young の General Astronomy だった。しばらくは此の本ばかりをくり返し読み耽った。文は平易で懇切であり、正確で、権威があり、読み行くうちにいよいよますます天文学に魅せられた。これは一生涯手放すことの出来ない本だ。しみじみ感じて、後年丸善から一冊買った。それは今でも有ってゐる。

やはり高校在学中であったか、私は丸善の書架で C.G. Dolmage という人の Astronomy of Today という本を見つけた。赤表紙の 350 頁に余るものであったが、1909 年版で、Young の本よりは新しいことも書いてあり、内容は美しい写真や図を沢山入れ、文章もキビキビして誠に愉快な本であった。Young の本は写真が一枚も無く、凸版画ばかりであり、文章はアカデミックで真に信頼し得る教科書であったが、Dolmage の本はそれと反対に、どこまでも通俗書で、なるべく術後や数理を抜きにし、趣味本位のものであったから、親しみがあった。この本もやはり若い頃の思い出の本として、今も有ってゐる。“天界”の創刊時代に一つ二つこの本から借りたものもある。

高等学校の図書館で私が熱心に見たものは、これらの書物のほかに NATURE という英国版の学術週刊雑誌であった。英国から日本へ到着するのに一ヶ月半もかかり、学校へ送られてからも教授たちが先づ眼を通されるので、我々生徒の眼に触れるのは発行の日から三ヶ月もおくれるのだったが、それでも、この雑誌の中の”Astronomical Column”は我々には新鮮な知識であった。1910 年の初め頃はこの欄に屡々ハリ彗星の位置予報が載ったが、しかしそれは私には残念ながらいつも too little and too late であった。この高等学校時代から一戸直蔵主幹の“天文月報”を読んだ。

大学に入って見ると、英独仏の天文書がどっさりあり、学術雑誌も主なものは揃ってゐた。しかし、当時の京都大学は学生は言うに及ばず、教授たちの中にも天文学を専攻する人は誰もゐなかったので、新着の図書や雑誌、研究報告などは大抵私が封を切って独占し

た。器械類も皆私の私有品みたいなものだった。今思い出して見ても、私の最も幸福な日々であった・・・(山本)

(『星と空』第 17 号、1955 年 6 月)

あの頃の思い出（１７）

暑さとの戦い

毎年夏になるとこの田上の山里でも相当に暑いのだが、しかしあの頃のことを思うとまだまだがまんが出来ると思う。―――それは1929年のジャヴ・スマトラ行であった。

あの年の5月9日に南方で見える皆既日食があって、それの見えるスマトラ島へ京都大学から6人が出かけて行った。当時花山天文台の建築工事が可なり進んでゐて、毎週1−2度は行って現場監督をしなければならぬ事情であったが、しかし研究上の又国際上の都合からどうしても出かけなければならない事情にあった。

3月24日一行は神戸からタコマ丸で出帆した。25日関門港、4月1日香港を経て同8日シンガポア港に寄った頃は既によほどの暑さで、行く先の炎天作業のことを思い、熱帯地用の特性ヘルメット帽を買わせられたが、これは二十数年後の今日でも使ってゐる。

4月11日スマトラ北部のベラワン・デリ港に到着、翌日上陸してメダンのホテルに入ったが、いきなり暗い寝室に案内されて、ひる寝をすゝめられた。これが暑さへの戦いの最初の態勢として教へられたものだった。13日目的地のカランイヌ村の野村農園に到着。それから約4週間ここに滞留して、日夜の猛作業にとりかかった。

まず四十余個の荷物を解き、観測器械を組み立てる一方、観測地点の地ならし、小屋の建設、夜は星を観測して観測点の経緯度の決定、その間にはオランダの官憲との交渉や接待、近くのオランダとドイツの観測隊との来訪往訪など、労働と観測と研究と交渉と、社交のため多忙を極めたが、この間猛烈な暑熱と湿気のため、又夜は雲霧と蚊軍のため苦労は多かった。しかし、昼間は幸いにしてシャツとパンツのもの半裸作業だったし、日没後は幾らか冷涼だったので、愉快に皆働いた。何よりうれしかった事は心配してゐた雲が5月9日の日食皆既の5分間のうちに一部晴れて、コロナの大型写真など可なり良いものが撮れたことだった。即夜、現像して見て、暗室の中で万歳を唱えた時のことを今でも忘れられない。

日食は終わって、あとの荷作りや帰還旅程のことは4人の同行者に委託して置き、自分は妻と共に5月10日観測地を出発し、翌日ベラワンデリ港出帆、ジャヴでの第4回汎太平洋学術会議に出席することになった。船はWaerwijkだったが、この船上でG.P. Kuiper君に会った。今アメリカで活躍してゐる天文家である。5月15日プリオク港に到着、直ちにバタビア市のホテル・コニングスプレーンに入ったが、あの日の暑かったこと！翌日の開会式も熱暑の中である。5日にはバスに分乗して、途中ボイテンゾルグ植物園など参観した後、夕刻にはバンドゥング市のホーマン・ホテルに入った。しかしバタビヤの第一印象が余りに暑かったため、前後2週間のバンドゥング生活も余り涼しいとは思わなかった。只6月2日にスラバヤから火山見学のため、トサリへ登った時だけは救われたような気がした。それからバリ島やその他各地の見学をすませ、学団と別れて、6月18日シンガポア港で伏見丸に乗船、香港を経て、7月1日神戸に帰着した時は波止場に出迎えて頂いた人々は皆暑

い暑いと言って居られたが、我々南方から帰って来た者は暑いどころか、むしろ涼しい日本だった。———そして、その勢で、この年の夏中に花山天文台の整備を完了、秋には落成式を挙げたのだった。(山本)

(『星と空』第 19 号、1955 年 8 月)

あの頃の思い出（１８）　大学の大火事

今ちょっと手許に古い日記が見当らないので、それが何年のことであったか、判らないのだが、何でも明治の末年か大正の初年頃であったと思う。秋の季節の或る晴れた一夜、京都大学の天文台で正規の如く夕刻後子午儀室で時刻の観測をした後、12 時頃、研究室のベッドで眠った、―――何時間か、よく眠ったのだったが、ドアに鍵もかけずにあったし、室内に小さい電灯をつけっ放しにしておいた。そのドアを力強く押し開けて入って来た者がある。“誰だ！”と言って自分はベッドから起き上がって見ると、真夜中にも拘らずチャンと一通りの服を着、帽子まで持ったＰ君だ。自分を見るなり、“山本君、火事だよ！化学教室だ！”と言いすて、すぐ又外へ出て行った。なるほど屋外はザワ付いてポンプを繰る音や人々のけたゝましい声も聞える。“それにしてもよく眠ったものだった。これは大変だ！”と思いつゝ、自分も服を着て外へ出て見ると、天文台から 200 メートル位しか離れてゐない化学教室から黒烟が濛々と上ってゐる。すぐ飛び出して現場へ行って見たが、その頃の化学教室は大学の正門に最大の建物で、明治 30 年大学創立以来の二階建、長さ百何十メートルに及ぶ堂々たるもので、一は今の京都大学の本部と法学部のある建物と同じ場所、大きさもほゞ今のものと同じで、只時計台だけは無かったが、その偉容は全京都、否、全関西の最も壮大な建築の一つであった。これが、満天の星の輝く深夜に黒煙を吐き、窓という窓からは赤々とした炎が舌を出し、その騒ぎの中で、教授たちや学生たち、守衛や小使たちまでがかけ声や呼び声をあげつゝ灰や炎をかぶった書物や器械類を担ぎ出しつゝ、煙をくぐってゐる有様は凄絶であった。近来の大火事で、学が居には全市からのヤジマ連もひしめいてゐたことであろうが、大学の正門も裏門も全部閉め切り、大学関係者と消防関係者だけしか出入させなかったので、構内の秩序は少しも乱れず、作業は行はれたが、何しろ火災の通報の徹底が後れたので、消防の着手がおくれたのは残念であった。自分は 12 時頃まで星の観測をしてゐたのであるから、今一二時間も観測を続けてゐたら、割り合い早く此の火事に気が付いたのかも知れないが、眼がさめた時には既に大騒ぎの最中で、化学薬品の爆発する音ももの凄く、とてもよその者など現場に近づけなかった。結局、夜明けまでにはさいもの大きい建築も全く焼け落ちてしまい、あたかも昔の絵で見るローマの廃墟の如きいたましい姿となって了った。―――自分の一生涯中、国内でも国外でも度々火事を身近に見、戦時中田上天文台も危うく火を出しかけたこともあったのだったが、しかし直接に眼で見た最大の火事はこの京都大学の大火事だった。あの夜、あの時の状景は空高く星座の星までもとどくように燃え上がった火炎と黒煙との印象が今も尚マザマザと思い出される。今日ではあの火事のことを知ってゐる人が大学にも殆ど無くなっただろうが。

それから幾日か経って宇宙物理講座の真情教授が、天体活動に関する講演をして、“大学の火事などは天体の活動に比べると大したものでない”と言われた一笑話も思い出される―――。(Y)　　（『星と空』第 20 号、1955 年 9 月）

あの頃の思い出（１９）

彗星 Pons-Coggie-Winnecke-山崎-Forbes-Crommelin

来 1956 年の秋には待望のクロンメリン彗星がやって来ることを、去る八月末の彗星流星合同委員会（花山）で話し合った。この星にはいろいろの思い出が湧く。

1928 年（昭和 3 年）十月 28 日の早朝、岩手県水沢の緯度観測所の技師であった山崎正光氏が獅子座に彗星らしいものを発見したが、翌日から 10 ケ日以上も曇り続けたので確かめられなかった。その後、同年十一月 19 日に南アフリカのフォブス(A.F.I. Forbes)というアマチュア天文家が烏座に 6 等級の一彗星を発見した。この発見の電報は十一月 24 日に日本へ到着し、同 26 日村上中敬氏（当時は京大学生）がそれらしいものを認めた。自分はこれが前記の山崎彗星ではないかと思い、続いて観測しようと考えたが、星は容謝なく南下してしまい、京都では何としても追跡が出来ない。そこで急に考へ直し、村上氏を同伴して口径 16 センチのエリソン反射機を携え、台湾に出かけることにし、十二月 24 日に出発し、25 日門司から大和丸で出帆した。そして 27 日に台北着、31 日には台南に着いて、師範学校に観測点を決定した。実は此の日恰も火星による一恒星のかくれんぼが此所で見える筈であったが、惜しくも空は曇った。

台南に約 10 日間滞在したが、天気は案外に悪く、ノヴ・ピクトリス星を一二回観測したほか、彗星は観測し得ずに、引き上げて、1929 年一月 3 日に京都に帰った。

この彗星はその後、南米や南アフリカのあたいの諸所の天文台でよく観測され、軌道は英国のクロンメリン（A.C.D. Crommelin）氏が徹底的に研究した。それによると、この彗星は約 28 年の周期を有つもので、珍らしい天王星族のメンバーであり、かつては 1818 年にはフランスのポン（Pons）が発見した星と同じであり、更に又 1873 年にはイタリヤのコジャ（Coggia）とドイツのキンネケとが独立に発見したものと同じものであることが判った。それ故、最初からの発見者の名を並べて見ると、これはポン・コジヤ・キンネケ・山崎・フォブスの彗星ということになる。しかしながら彗星の命名には今は一定のきまりがあり、又特にこの星の軌道や歴史、素情等がクロンメリン氏の努力によって明らかになったものであるから、1939 年クロンメリン博士が死去した後、同氏が一生涯を彗星の研究に奉げた功蹟を紀念するため、この山崎フォブス彗星を“クロンメリン彗星”と呼ぶことに学界では決定した。発見者の名によらず、軌道研究者の名によって命名された彗星はハリ彗星と、エンケ彗星と、このクロンメリン彗星との三つだけである。

山崎氏の発見はフォブス氏の発見より 22 日も早かったにも拘らず､通報がおくれたため、一時は発見者としてフォブス氏の名をなさしめたのであったが、あとですべての事情が判明し、山崎氏には改めてパシフィク天文学会からドノホー賞牌が贈られた由である――― 山崎氏は戦後退職して、現に高知県に健在である。

（『星と空』第 21 号、1955 年 10 月）

あの頃の思い出（２０）
ペライン博士に会った頃のこと

ペラインという天文学者の名を知ったのは、やはり最初は彗星をよく発見する人としてであったと思う。実際彼は 1895 年から 1902 年までの間に合計 9 個の彗星を発見した経歴を有つ。それに尚、彼は木星の第 6、第 7 の衛星も発見してゐる。それから 1901 年のペルセウス新星からガス霧がが膨張して行くのを発見したのも彼であり、又、クロカ反射鏡で観察し得る銀河外の星霧の数が幾百万とあることを知ったのも彼であった。これらは皆彼が 1893 年から 1909 年まで 16 年間リク天文台に勤めてゐた時の業蹟である。1909 年に彼はリク天文台を辞して、遠く南米のアルゼンチン国のコルドバ天文台長に就任し、1936 年に定年で退職するまで 27 年間よく働いた。1910 年にハリ彗星の立派な写真を沢山撮ったのは此の期間中であった。ペラインは日食観測にも熱心で、1901 年にはリク天文台の観測隊長としてスマトラ島へ遠征したこともあり、南米に赴任してからでも、1914 年八月の日食観測にはリク天文台の隊に加わって、ロシヤのクリミヤ半島へ遠征し、第一回の世界大戦勃発に会って困難したこともあった。ペラインが彼自身の名を負う有名な周期彗星を発見したのは 1896 年 12 月 8 日であった。当時の光度は８等級で、軌道がビーラ彗星に似た楕円であることは早く知れた。この星は 1903 年に再発見されなかった。しかし 1909 年にはドイツのリステンバルトの予報によりハイデルベルヒ天文台で首尾よく発見された。その後、1922 年秋に英国とソ連とで予報が発表されたが、日本の中村要氏が発見したとのニウスが飛んだ外に、何の音沙汰も無く、結局この発見は確認されず、今日に至ったのであった。（この年の事情は本誌第 10 号に記されてある）

バーナードと言い、ペラインと言い、何れも第 19 世紀中に世界的の名を馳せたアメリカの天文学者であり、今日では既にクラシックな名となってゐる人であるが、この何れもの人に自分が会ったことがあるのは身の光栄だと思ってゐる。ペラインに自分が会ったのは 1923 年 9 月 18 日で、当時それは日本では関東大震災の後の混乱時機であったが、アメリカでは同年 9 月 10 日の皆既日食を見るため国内国外から多くの天文学者が南部カリフォルニアに集った。その期を利用して、パサデナ市で全米天文学会が開かれた時であった。学会は 16 日から開かれたが、その 3 日目の 18 日に市内の或る場所でリク天文台のリユニオン（同窓会）が開かれ、エイトケン台長を始めとして、34 名の者が出席した。その席に自分と英子とは出席して、はからずも南米から来てゐたペライン氏夫妻に会ったのだった。ずいぶん以前のことだから細かい事は覚えてゐないが、自分は其のタペライン氏の手を握り、“吾々は京都であなたの彗星をさがしてゐます”という挨拶をしたのを覚えてゐる。ペライン氏がこの自分にどんな返事をしたか、忘れてしまったが、当時 56 歳の中老の同氏は均斉のある有髭の上品紳士で、中肉中背の体格の持ち主で、きわめてしとやかに応待してくれた印象が残ってゐる。とてもアルゼンチンの奥地で、開拓的な研究をしてゐる荒くれ男とは見えなかった。夫人はペライン氏よりもよほど背の高い典型的なアメリカ型の婦人

で、可なりよくしゃべった人であった。この時一同が撮影した写真は今も尚自分の手許にあるが、可なりよく保存されてあるので、すべての人の顔や姿がハッキリと現れて居り、三十余年前のあの思い出の一夜を思い浮べさせるのに充分である。

今回、長谷川一郎君の努力が報われて、中村要君と自分との責任であったペライン彗星失踪の宿題が解けた機に、三十幾年前のペライン氏と会った日のことが思い出される。

ペライン氏は 1951 年 6 月 21 日に 83 歳を以て、南米アルゼンチンで死去された。

（『星と空』第 22 号、1955 年 11 月）

あの頃の思い出（２１）

台湾の日食の頃のこと

今からちょうど15年前､即ち1940年は私の身辺に於いても可なり事の多い年であった。私はこの年の初めから田上天文台を建設する計画をねり、春の頃から邸内には3人の大工や其の他十数人の人々が入り込んで、労作を進めた。11月12日には水星の太陽面通過が起ったが、その時はまだ観測室が出来上ってゐなかったので、屋外で晴天に恵まれながら、首尾よく観測をやり遂げた。

それより以前、9月21日には皆既日食があって、これはアジヤ大陸から太平洋へかけて観測し得る都合であったが、当時すでに日支事変が起ってゐたし、国内の生活条件も緊迫して居り、海外旅行も不自由であった。しかし幸いなことに、この年の日食は台湾の北部でも見えることになってゐたので､“天界”第242号には詳しい日食地図を発表すると共に、何とかして観測に出かけたいと考えた。しかしどうしても年内に天文台の建築工事を終りたい計画でもあったので、私自身台湾行のことをギリギリまで決定しかねて、家族や友人たちをハラハラさせた。実は神戸まで乗船の申込みをしに行く暇も無いくらゐ多忙であった。しかしいよいよ絶体絶命になって、9月15日に秘密になってゐた船便の約束をし、16日に田上を出発し17日門司港で乗船、20日に基隆港に到着した。この船には井本、飯、坂ノ上、鏑木、富谷等のO.A.A.会員たちが同船されたので､船中でいろいろ御世話になった。台湾では吉村、服部、蔡、諸氏に迎えられ、即日富貴角の灯台官舎に到着した。これが日食のすぐ前日のことである。天気の事は心配であったが、もはやあれこれ選択や考慮の余地は無かった。

翌21日、早く起き、正午まで諸方から集まって来た約80名の人々と共に観測陣を張った。戦時態勢の時節ではあったが、なかなか豪勢な意気込みであった。空は朝から曇り気味であったが、幾らか雲が淡くなる気配なので、希望を有ち続け、12時10分の初虧をうまく捕えた。しかし食分の進むと共に雲の来往は激しくて、決して楽観を許さない。13時41分に皆既食が始まったが、皆既時間は2分15秒間。この間に幸いにして雲が切れ、肉眼や双眼鏡による観測者は確かに、コロナの姿を捕え、或る人々は写真も撮った。プロミネンスも美しかった。しかし、それなりで、15時9分の復円の観測は全く曇られた。

実に劇的な日食観測であった。“天界”第246号には当日の状況が詳報されてゐる。あの記事は今尚何回読んでも実感を呼び戻す。

食がすめば、一刻も早く帰らねばならぬ。これが自分の責任感であった。そこで、速水氏等の好意により、9月23日の基隆発の便船に乗り、門司に下船して、26日に田上に帰った。あんなあわただしい日食行はなかった。しかし、当時自分が富貴角の岩頭から観測直後の感想をNHKによって放送した録音板は、今尚手許に保存してあるので、時々出して見て、あの時のスリルを味わってゐる。(山本一清)

(『星と空』第23号、1955年12月)

これからは余分の生涯（所感）

私は曾祖父の顔は知らない。生れた時、私には祖父母と父母とが健在で、“五十年ぶりに家に男の児が生れた”と言って喜んでくれたらしい。今居る家の奥八畳の一室でうぶ声をあげたので、その時祖父が書きつけてくれた紙片が今尚その室の柱にはりつけたまゝになってゐる。“明治二十二年五月二十七日午前六時　男児出生”と書いてある。

祖父は家代々の医者であり、詩や歌を作り、又県会に出たり、地方の教育行政にたづさわったりしたが、明治四十三年十月に死んだ。満 66 歳であった。

父は私の母の婿養子として隣郡から迎えられた人で、医者ではなかったが、一生を教育と教育行政にささげたのだったが、60 歳で退職し、63 歳でなくなった。可なり酒をしたしみ、それが寿命に関係したらしい。私は祖父の意に反して医業を継がず、父に習って教育界に徹することもせず、只今まで天文学のために半生を暮して来たが、数えて見れば昨 1955 年末を以て満 66 年 7 ヶ月の齢を重ね、あたかも祖父の亡くなった年齢を正確に越えたのである。———これ以上の年月は父や祖父の年齢を越えたことになり、或る意味に於いては私の“余分の生涯”である。昨年四月に脳溢血の兆候で倒れた時も、私の唯一の願いは“せめてもう半年長生して、祖父の年齢に達したい”ということであった。幸い身体は回復して希望の年を越えた。まことにうれしくてあり、又光栄だると思う。

現在の私は予想以外に健康である。そしてここに 1956 年を迎えたのである。今後いつまで余生が与えられるかわからないが、何としてもこれは余分の寿命であると思い、出来るだけ人のため、世のためにさゝげたい心で一ぱいである。

まづ何よりも天文学であるが、私は今良い後継者が与えられたので最も喜ばしい幸福感に浸ってゐる。この意味に於いては、“これで私はいつ死んでも宜い”満足感である。只、今後私に与えられる時日を用いて、若干の著述をして見たい。

山本天文台については、創立以来満 15 年以上を経たが、何しろこの 15 年間に大戦争と、戦後の混乱期を経過したので、創立当初計画したことが 1/3 も達しられてゐない。そして、年齢と共に体力のみが徒らに衰えて行くのを感じる。しかしながらもはや戦後の混乱もほゞ収まり、国内国外との学問上の友好関係もほゞ戦前の通り、或はそれ以上に回復した。この機に老馬に鞭打って年来の理想の実現のため一奮発して見たい。今年は大に観測を励みたいと思う。中にも火星の写真観測、遊星界の熱電観測、恒星界の光電観測などが、差し当ってのプログラムである。

気象観測はルーティン・プログラムを今まで１５ヶ年続け、滋賀県の気象上の盲点になってゐる此の地域のための気象資料を一応獲得したので、今後は新しい仕事には手を付けないが、しかし器械が健全に動いてゐる限り、尚継続したいと考えてゐる。

最近国内にも国外にも旧友の消息が知れると同時に、新しい友も増した。今年中には北海道から九州まで一巡して見たいし、台湾の招待にも応じたい。（山本）

（『星と空』第２４号、1956 年 1 月）

わが交友（1）
Harlow Shapley

シャプリの名は同君がキルソン山の天文台で球状星団の研究をしてゐる頃から急に有名であり、1919年に京都の新城教授がキルソン山で観測中のシャプリ君と一夜話して来たという土産話を聞いて、特に親しみを覚えたが、自分として文通などし始めたのは1920年頃からであったかと思う。1921年にキルソン山から転じてハーバード大学の天文台長に就任したので、1922年自分がアメリカに留学するようになって、第一に考えたことはヤーキス天文台でバーナードに会いたいことと、ハーバードでシャプリに会いたいことであった。

さて本当に、シャプリの手を握ったのは、1922年の十二月末で、米国の理学協進会（A. A. S.）の大会がボストンで開かれた時であった。ヤーキス天文台からステビンス氏と同車した列車で、ボストンの南停車場に着き、ホテルの室に荷物など置いて、すぐマサチュセッツ工学院の会場にかけつけたが、それ以来数日間可なり多忙なプログラム中にシャプリ、ライテン、カンベル等に幾度も会い、翌年にはケンブリジ（ハーバード大学や天文台のある市）に来るから、よろしく頼むというようなことを言ったと記憶する。

ヤーキスを立ち、キルソン山で３ケ月を費した後、再びボストン・ケンブリジにやって来たのは1933年10月であったが、それから翌年８月まで約10ヶ月の間自分はハーバードに居たわけである。当時既にE.C. ピケリングの後を継いでハーバード天文台長となってゐたシャプリの地位は米国天文学界で可なり重いものであったが、しかしこの天文台にはヘイルやキングやゲリンやミス・カノン等の老大家が居たので、シャプリ君は台長として全部の台員を指揮するといふ気持よりも、気軽に動きまわって皆の人々の世話を勤める様子であった。年齢はまだ37 - 38歳位で、元気一ぱいの働き盛りであった。

或る日、シャプリ君は私に向って、日本の話を台員一同にしてくれと言うものだから、夕食後の一時、十数人の会で日本の天文学のこと、京都のこと、それから天文同好会（東亜天文学会の前身）のことなどを一時間足らずの間に話した。これがシャプリに印象を与へたらしい。暫くすると、シャプリはこの天文台を中心としてボンド・クラブ（Bond Club）というものを作ると言い出した。それからいよいよ発足したが、何のことは無い天文同好会の米国版であった。それから又、別の日、シャプリは自分をボストンの或るクラブに連れて行って、一席話をさせられた。自分は此の席で百人足らずの紳士たちの前に立ち、東京大震災に対する同情の御礼を述べた後、天文学の使命を言ったようなことを述べて、“若し世間の人々が皆多少の天文家になったならば、世界は平和になる”というようなことを言った。これが又シャプリの御気に入ったらしく、其の後幾度もくり返して同君は天文は世界平和の鍵だと言ってまわってゐた。

戦後、日本の天文界にも広く読まれるようになったSKY and TELESCOPEという雑誌はボストン・クラブが発展した一つの形であり、あの雑誌の表紙に出てゐるSkyという題字はシャプリの自筆の蹟である。自分はあの字を見る度毎に、シャプリ君のおも影を思い出す。

シャプリ君は定年で数年前に退職したが、今は夫妻二人きりで、アパート住いして、研究と講演に余念が無いらしい。一度、日本にも招きたいと考えてゐる。(山本生)

(『星と空』第 25 号、1956 年 2 月)

わが交友（２）

Otto Struve

私が 1922 年に米国のヤーキス天文台に着任した時、ストルーベは既に約半年も前からの先着者であった。まだ同君は独身で、天文台の 60ｃｍ反射機の地下室に住み込んでゐて、自炊してゐたが、おひるの食事はヴンビースブルック教授の宅へ食べに来るのが常であったから、我々とは毎日顔を合わせた。のみならず、研究室も私の隣の室で、ドアはいつも開け放しのまゝであったから、同君が使用してゐるミリヨネヤという計算機のガチャガチャという音にはいつも悩まされた。

ストルーベは欧州に於ける天文学者としての名門の家系である。第 19 世紀の初め、ロシヤのドルパト天文台に居り、ついでプルコヴ天文台天文台長となったヴィルヘルム・ストルーベは二重星の精密観測をやった人で、今でも二重星にΣという符号の付いてゐるのは皆この人のものである。この人の子にオトー・ストルーベという人があって、これも父の後を継いでプルコヴ天文台長となった。二重星の中で 0Σという符号の星はこの人の発見である。このオトー以後、更に幾人かの天文家が現れて、ドイツのベルリン天文台にも今世紀に至るまで土星の観測で名を挙げたヘルマンという人がある。

わがオトー・ストルーベ君はロシアのハリコフ天文台長であったルドヰヒ氏の子であるが、共産革命の時ロマノフ皇帝に味方したというので、死刑の宣告を受け、1922 年にアメリカに亡命して来て、ヤーキス天文台のフロスト台長に保護されたのであった。私と初めて会った頃には、まだ英語はサッパリダメであったが、フランス語とドイツ語とに通じてゐると言うので、皆に重宝がられてゐた。フロスト氏は自身が失明して、観測が出来なくなったので、このストルーベ君を其の後継者にするつもりで、恒星のスペクトル観測をせっせとやらせてゐた。しかし又、仕事のあいまにはヴンビースブルック氏の指導で小遊星の位置観測をしたり、軌道の計算などを教わってゐた。

私とは年が余り違わないので、よい遊び友だちで、よく散歩したり、ジュネヴ湖上でボートに乗ったりした。

1933 年私がアメリカへ再遊した頃には同君は既にヤーキス天文台長に抜擢されてゐて、内外に重きをなし、スペクトル学者としての地位は確立し、ちょうど其の頃マクドナルド天文台の計画と設計とを進めてゐた。かつてのミス・ランニングと結婚して、暖い台長公舎にも私は招かれた。

第二次世界大戦中、同君が何をしてゐたか、私は知らない。又、私は知りたいとは思わぬ。しかし、戦争が終るや否や、同君は私の所へ親切な手紙をくれて、安否を問い、何か不自由は無いかときいてくれた。同君のおかげで、私は戦中及び戦後のアメリカ天文暦や其の他の文献を沢山送られて来た厚意は忘れられない。

戦後、同君はヤーキス天文台長とマクドナルド天文台長の地位を人にゆづって、カリフォルニア大学天文部長に就任した。日本に最も近い太平洋岸へやって来たわけで、私とし

ては殊にうれしい。

同君は今やアメリカ天文学界の重鎮であるばかりでなく、1952 年から 1955 年までは国際天文同盟のプレジデントをも勤め、祖父（Otto）や曾祖父（Wilhelm）にも劣らない名声を得た。若かった頃の事を思って、わが事のようにうれしい。（山本）

（『星と空』第 26 号、1956 年 3 月）

わが交友（３）

G. Van Biesbroeck

ヴン・ビースブルックという人の名は、自分がまだ大学生であった1910年時代から知ってゐたが、1922年初めてアメリカに渡って、ヤーキス天文台に滞在するようになって、いきなり此の人の家に下宿するようになって少々驚いた仕末であった。と言うのは、この人はもともとベルギーの学者であって、当時としてはヨーロッパからアメリカに渡って来たばかりであり、英語も充分には話しきれない「外国人」みたいな人であったから、この人及びこの人の一家族と同居するのではアメリカ生活にはなじめないだろうし、又それだけいろんな苦労が多かろうかという予想であったからである。予想の如く住み込んで見ると、ヴンビー氏の言えでは平常フランス語の生活であった。衣食住すっかりフランス流である。従って英語の勉強には全くならなかったのには一寸面くらった。しかし、一週間、二週間と暮して行くうちに、いろいろ予想しない愉快なことも有難いことも感じられた。

ビースブルックとは英語で言へばlittle brookで、即ち小川さんである。Vanがついてゐるから、オランダ系の名門である。どうも芸術家の家系らしく、食堂の片隅には等身大の大理石の女身像が置いてあり、主人も婦人も共に絵を画く趣味がある。さすがに中央ヨーロッパの高い教養を身につけてゐられる人々である。子女が三人、それに主人の妹が一人、合計6人の一家族である。当時、長女のシモン嬢は小学校の4年級、次女のミシリン嬢は入学したばかり。何れもワンパク盛り、長男エドキン坊は生まれたばかりの赤ちゃんであった。こうした家族の中へ日本人夫婦が入り込んだのだから、毎日面白いことが多かった。

天文学者で、殊に観測家であったから、夕刻は忙しいので、毎日のディナはお昼に出た。この時にはロシヤから新来のストルーベ君もやって来たので、食卓の国際色はいよいよ濃厚で、しかし何としても主調は欧州風であって、米国風ではなかった。

天文台の研究室でも、ヴンビー氏とストルーベ君と自分とは隣り同志なので、最も親かった。このヴンビー氏は1880年ベルギー国のガン市生まれで、ガン工業大学を卒業後暫く土木技師を勤めたことがあり、1905年頃からドイツに入って、ハイデルベルヒ、ポツダム等の天文台に勤務し、更に1908年からはブリュッセルの王立天文台（今のユクル）に勤めてゐたが、第一回世界大戦の時、ベルギー国がドイツ軍に荒らされたので、アメリカに渡り、1917年以来、ヤーキス天文台の助教授になった経歴の持主であった。一ヶ年つき合ってゐる中にこの人のやさしい人柄、深い学的教養、研究に対する強い情熱がだんだんわかって、自分としては真に尊敬すべき良い友を与へられたと思い、フロスト台長にも感謝するようになった。自分がヤーキスに滞在中、たまたま日本から吉田源次郎氏が訪ねて来られ、ヴンビースブロック氏と対談された中で、吉田氏がヴンビ氏に“何故にこのヤーキス天文台にやって来られたのですか？”と尋ねられたのに対し、ヴンビ氏は“世界一の大望遠鏡で思う存分観測して見たい念願でした”と答えられた。ヴンビー氏は高齢のため1945

年に退職されたが、しかし其の後もやはり個人として観測や研究を続け、76 歳の今日猶やはり彗星や小遊星の位置観測には第一級の業績を挙げてゐる。(山本)

(『星と空』第 27 号、1956 年 4 月)

わが交友（４）
Miss Anne S. Young

私が学生であった頃、天文学の教科書として最も広く読まれたものは米国の Charles A. Young の著した General Astronomy であった。この本は今でも権威ある一標準書である。この著者ヤング博士は初めダートマス大学教授であったが、1877 年にプリンストン大学に迎えられて、その天文台長となり、主として太陽物理学を開拓した人であり、ダートマス時代にはフロスト（後のヤーキス天文台長）を、又プリンストン大学ではラッセル（後のプリンストン大学天文台長）を指導した人である―――このヤング教授は太陽の逆層やコロナの緑色光線を発見した功績者である。

このヤング氏の姪に Anne S. Young という婦人天文家がある。1871 年生れであるから、今は相当な老女史であるが、若い頃から伯父ヤング博士の感化を受けて天文学に精進し、カールトン、シカゴ、コロンビヤ等の諸大学に学び、1892 年ホイットマン大学の講師になった。その翌 1893 年からはマウント・ホリヨク大学の教授兼天文台長として殆んど一生涯を研究と教育とに献げた女史であったが、1936 年に定年退職して、今は気候の良い南カリフォルニアに余生を養ってゐる。

私はこの女史と 1923 年の春、ヤーキス天文台で初対面して以来の交際であるが、その年の秋 9 月には共にカリフォルニア沖のカタリナ島へ日食観測にも行ったし、又ニウイングランドに移ってからは度々マウント・ホリヨク女子大学へも訪れて、親しみを加へて来た。私がハーバードの天文台に居る間にも、度々訪ねて来てくれたことが度々ある。

研究上ではこのヤング女史が、太陽黒点の熱心な観測者であり、又変星の研究にも長い間打ち込んで居られたので、話しはよく合った間柄であった。一生涯を独身で、女子の高等教育と天体の研究に献げた人であるが、姿の上品な人柄のやさしい、典型的なレイディで、多くの子弟に愛されてゐる教師であり、学者である。

私との交際は前記の如く、1923 年以来、33 ヶ年に及んでゐるが、今尚美しい筆跡で親切な手紙を度々よこされる。殊に、こんどの大戦が終った直後いち早く見舞いの手紙をカリフォルニアの閑居地からよこされ、この最近十年間少しも変らない友情を傾けて、書物や学術雑誌や、その他の物資など贈られ、そうした関係は今も尚続いてゐる。―――初めの頃、私はこの女史の背景として故チャールズ・ヤング教授のことを連想したが、この頃はもはやその連想を乗り越えて交際してゐる。

今年、女史は満 85 歳の高齢であるが、まだ々々壮健で、絶えず幾種かの天文学書や学術雑誌などを読んで居られるらしく、頻繁に送られて来る手紙の上にも話題は豊富であり、多方面である。宗教関係の仕事にも打ち込んで居られるらしく、時々女史の紹介で、日本にやって来られる宣教師たちを紹介して下さる。（山本）

（『星と空』第 28 号、1956 年 5 月）

紀州の旅

去る 6 月 9 日から約一週間、小槇さんと同道して、紀州の北から南まで、講演と視察で訪問の旅をした。9 日は午後に高野山麓の橋本で講演したが、小槇さんは地球観測年と流星の話、私は宇宙構造の話をした。この地は五六年前に来たこともあるのだが、西田さん以外は皆新しい顔であった。せっかくこゝまで来たので、二十年ぶりに高野山に登って見たかったが、時が無かった。

10 日は和歌山市の招きにより、時の記念日の催しに参加した。夜の会場には地元の高城武夫氏も見えた。私は落ち付いた室内で熱心な 200 人ばかりの人々に従来の平均時と現在の暦表時（Ephemeris Time）との区別を話し、尚地球の不規則性とその理由とを解説した。

11 日から 13 日まではみかんの産地有田川の流域で、保田、宮原、金屋の各地を訪ねた。正に小槇氏の郷里である。このあたり、1953 年の七月空前の大洪水に会い、あらゆる被害を受けたが、今は復興し、口径 15ｃｍの反射赤道儀を備えている学校が幾つかあるには驚いた。

12 日は金屋の小槙氏の御宅を訪れ、最近落成した口径 20cm の赤道儀室を見せて貰った。（天界 37 号口絵写真）まことに大きすぎず、小さすぎず、手ごろの有効な器械で、建物も屋根の軽妙な移動、心地よい床、照明装置、片隅には休息のためのベッドまである――まづ模範的なアマチュア天文台である。小槙さんはこの室内で、勿論、流星も観測されるのである。

14 日は古座、15 日は那智に遊んだ。那智の瀧は私は二度目であるが、この滝は眺望のために誠に都合よく出来てゐて、美観と壮観とを満喫する。那智神社にはヤタ烏の古事に因んだ三本脚の画かれた土産物を種々求めた。言うまでもなく、この烏は 2000 年前東洋で発見された太陽黒点を表現するものである。

那智寺の境内には直径 1m以上もある「天降石」がある。これが果して隕星であるか否か即断は出来ないが、この石を前にして、小槙さんと私は「音波天文学」を論じた。

南紀一帯は数年前、伊達和光君が天文教育と普及に奔走した地方である。今のこのあたりに伊達君の足跡は残され、いろいろの思い出が発見される。太地の海野君の透視天球儀が、いよいよ公許されたのも、元は伊達君の指導による。下里の海岸を眺めて、伊達君の事をしきりに思う。あの好青年が、二年前東京大学の運動場で急死しようとは、予想外であった！

15 日の午後と 16 日の午後とは新宮で講演した。新宮の市民たちに“原子爆発と天文学の話”と“宇宙旅行の話”をした。時勢がらのトピックで、皆よく聞いてくれた。質問も活発であった。

15 日の夜は新宮市外広角の田阪一郎君の宅に泊った。田阪君は自作の口径 30cm 鏡がこわれたが、今は以前よりも更に良い鏡が出来上がり、アルミ鍍も最近完了して、鏡筒内に収まってゐる。4m平方の観測室は階上が望遠鏡、階下には研究室が置かれ、一人が天体を楽

しむには恰好の設備である。望遠鏡筒は以前の「パロマ式」を排し、今のはキルソン山の2.5m式のマウンティングに改められてある。専ら遊星面の観測を目的とするものである。田阪君は手広く米作の農事以外、500羽の鶏を養い、南紀第一の望遠鏡を擁して宇宙に嘯いてゐる。うらやましい青年学者である。

新宮高校は畑中武夫博士の出身校である由、南紀と天文学の関係も深い。(山本)

(『星と空』第30号、1956年7月)

名古屋えの行き帰り

七月 14 日、即ち“カトルズ　ジュイイェ”。これは今から 167 年前、パリのバスティユ監獄が民衆一揆の手に爆撃されて、フランス革命が勃発した日である。この日の正午、草津駅を立って名古屋へ行く。送り風で列車の中は蒸し暑い。彦根駅を過ぎる頃、井伊の名城がはるか湖岸に聳えているのが見える。彦根を通る毎に私は二百年の昔、ここに病身を養いつゝ天文を研究し続けた平石時光の事蹟を思い、この人の遺物が今尚図書館の倉庫の中に未研究のまゝしまい込まれてあるのを惜しいと思う。

伊吹山が北窓外に見えて来る。今は夏の登山の季節で、キャンパーたちのテントが中腹に点々と見えてゐる。私も五十何年前、一かどの植物学者気取りで牧野富太郎博士に案内されて、この山を幾度か上り下りし、数百枚の圧葉標本を作ったことがある。

今から百二三十年前、この伊吹山の麓、国友の里で一貫斎能当という奇人が日本で始めてのグレゴリ式の反射鏡を自作し、月や土星や木星、金星などを観察したほか、15 ヶ月にわたり毎日（原則として午前と午後と二回づつ）太陽黒点を観測した。その記録は今尚国友家に現存してゐる。正にこれは“日本のガリレオ”としての不朽の業蹟で、近江の誇りであるが、世人はその学的価値を知るや否や？

15 時名古屋に着、金子氏に迎えられ、広小路あたりを暫くドライブした後、今日の会場のテレビ塔に入る。私はこのテレビ塔が好きである。このテレビ塔を見ると、いつもパリのエフェル塔を思い出す。エフェル塔は高さ 300m であるが、名古屋のテレビ塔は 180m の高さで、約半ばでしかない。しかし、そのスマートな形は彼我殆んど全く同じで、共に広い平野の大都市の中央を占め、目に見る近代社会の構築を象徴するもの。塔の内部の構えも面白いが、内部以上に私はこの外観を立派だと思う。戦争で名古屋は天下の名城を失ったけれど、城を再建する代りにこのテレビ塔を建てた名古屋人は賢明な近代感覚の持ち主である。

17 時からこの地方の O.A.A.会員たちが集まったので、三階の一角で小集会を開き、二重星の天文学について、学の歴史から近代の進歩まで、又二重星の研究や楽しみ方について短い講話をなし、後質問や座談があり、19 時終った。その夜は犬山の山田氏の御宅に泊めて頂く。

翌 15 日午前中、山田氏に案内して頂いて、犬山城のあたり木曽川の清流畔を散歩する。気温は可なり暑いけれど、木蔭は愛すべく涼しい。路辺のベンチに腰を降して、景を賞し、星を語ること小一時間、それから見送られて鵜沼から列車に投じ帰途に就く。長森あたりで窓外から正村氏の天王山天文台を望んだがハッキリとは見えなかった。

岐阜の金華山の頂上には今、昔の青葉城が再建されつつある。昨年はケーブルも出来たのであるから、この城が落成したら、山の上は一層の賑わいとなるだろう。しかし、言うまでもなくこの城の西隣りには終戦以来坂井氏が経営する岐阜天文台がある。地勢上好い場所なのだが、この天文台の危機に当面するのでないかと気にかかる。　（1956 年 8 月号）

Lowell Observatory Visited

3回ローエル天文台を訪問（その日の日誌）

1923年10月26日（金）[パサデナからケンブリッジへ行く途中]英子同行。汽車は走る。朝8時50分アリゾナ州セリグマン駅で食事。こゝから時刻は山岳時に変る。昼食はキリヤムス駅、午後1時40分フラグスタフ着。E.C. スライファ君に迎えられ、車で直ちにローエル天文台に伴われた。天文台は市外の“火星丘”（Mars Hill）上にあって、見晴らしが良い。北には13000呎のSanFrancisco峯が聳えてゐる。天文台では台長V.M. スライファ氏に迎えられ、24吋の望遠鏡や図書室内の多くの天体写真を見せられた。夕刻、食事のため下町に下り、すぐ又迎えられて天文台に帰って、先刻に引き続き多くの天体分光写真を説明された。午後8時過ぎ、大急ぎ24吋で星団など見た後、停車場に駆けつけ、9時発のScout号に乗る―――ローエル天文台には僅か半日の訪問であったが、両スライファの親切な待遇により愉快であったばかりでなく、学術的に非常に力強い暗示を受けた。殊に彗星と遊星の写真及び火星表面学上に最も貴いものを得た。　（天界　40号）

1933年7月18日　［シカゴからロスアンゲレスへの単独行］

朝10時50分右窓にサンフランシスコ峯が見え始めたと思う間もなく、汽車はフラグスタフ駅に着いた。下車して二三歩あるき出した時“ドクタ・ヤマモト”と近づいて来たPに迎えられ、郊外の「火星丘」上のローエル天文台に案内される。街路は10年前に比しスッカリモダンになってゐる。台長室でV.M. スライファ博士と挨拶する。去月シカゴの学会でも会ったので、それ以来の旅行談をし、ついでトンボー君に紹介される。同君は冥王星の発見者である。この大発見のお祝いを言うと、同君は私をコンパレータ室に導き、「Plutoです。1930年1月23日の乾板です」と言って、貴重な資料を見せてくれる。それから台長の案内で冥王星の発見に用いられた13吋のローレンス・ローエル望遠鏡を見せられた。

昼食のため市街に下りた後、再び天文台に戻り、ランプランド博士に紹介され、星霧や新星の写真を見せられた後、一旦屋外に出て、40吋の反射鏡を見せて貰った。ついで又台長の案内で、24吋の赤道儀で大遊星や恒星スペクトルの撮影装置を見せられた。15時半台長や台員諸氏に感謝しつゝ別れを告げ、15時47分発の列車で西行する。　（天界　158号）

1937年8月9日（月）　［シカゴからロスアンゲレスに向う途中］　3人同行

16時フラグスタフ着、駅頭でV.M. スライファ台長の出迎えを受け、直に火星丘上の天文台に案内された。台長室でE.C. スライファ氏にも会い、ペルー日食の土産話などした。この天文台の人々は今まで度々日食観測の経験がある人々なので、話ははづむ。台長の案内で、冥王星発見の13吋機や、火星観測、恒星スペクトル観測用の24吋赤道儀を見せられ、故ローエル博士の墓にも礼する。夜はMonte Vista Hotelに泊る。

翌10（火）　スライファ台長の斡旋で雇い入れた車にのり郊外にドライブし、先づ有名

な隕石坑を見、午後は同じ車でグランドカニオンを見に行き、20 時キリヤムス駅で西行列車に投ずる。乗車前、駅前広場でフィンスラ彗星を北天に見る。(天界　206 号)

(『星と空』、第 32 号、1956 年 9 月)

オーロラを見た日
[Auroral Apparitions]

1923年2月25日（日曜）　米国ヤーキス天文台にて

午前2時半起床、観測衣を着て24インチ機の観測塔に足を運ぶ。珍しや北方の地平線上に広く明るいオーロラが見えてゐる。自分にはこれが生れて初めての経験である。40インチ赤道儀で観測中であったヴンビースブルック氏も観測を中止し、屋上に出て来て眺める。大きな光芒がユラユラと動き、ひらめくのは全く壮観である。まもなく光は消えたので、自分は3時から24吋反射鏡で乙女座U星や猟犬座の渦状星雲M51、大熊座ζ星などを撮影す。（後略）　（天界　31号より）

これが自分の最初のオーロラ観察であったあ、はからずも去る8月9日午前3時40分火星を観測し終り、北窓を閉じようとして外を見た瞬間、そこに33年半ぶりで再びオーロラを見た。

その夜は三人の客と観測を共にしてゐたので、オーロラも亦一所に見て楽しんだ――この夜のオーロラは、しかし以前ヤーキス天文台で見たものと異り、あたかも日出前の曙光の如く、淡黄白色の光芒が北極星下を輝かすのみで、放射状には現われてゐなかった。只、約3〜5分の周期を以って明滅動揺する様は雄大荘厳であった。

翌10日の朝も2時から北天が明るいのを自分は独りで見た。

その後暫く何も見えなかったが、9月5日2時15分頃、又々北天にオーロラを見た。ところが、その次ぎの夜（即ち9月5日23時頃)、火星を見ようとして床から起きた時、先月末のものとは違い格段の明るさの光が北の空に現われた。こんどは立派な放射状で、ゆらめきの特徴を見せてゐる。英子もねまきのまゝ観測室に登って来て、小一時間ばかり飽かず眺める！色はやはり淡黄色である。

丁度この日は8月9日から27日目で、太陽の自転周期に当るのも面白い。

8月以来、自分がオーロラを見たことが、新聞に出たり、放送されたりしたので、その後諸方から多くの通信に接した。

神戸の前田やゑ氏、三井訓子氏等た六甲山上でオーロラを見られたという通信は、自分の観測法を確立するためにも重要である。

前田氏は8月9日と9月5日とに見られ。

三井氏は9月7日に見られた由、図を添え、詳報された。

オーロラは紀元620年以来、わが国の記録にも30回以上現われてゐるが、これらは皆特に著しいものばかりである。オーロラに関心を有ち、オーロラのことに始終気を付けてゐる人々（Aurora-mindedの人々）にはもっともっと頻繁に見える筈である。自分は8月9日以来、9月20日までの間に既に10回以上も見てゐる。但し、大都会ではダメ。必ず田舎の晴夜で、月光の無い時である。　（『星と空』第33号、1956年10月）

ゆかりの友

水野千里さん

大正九年の秋、吾々が“天文同好会”（今の O.A.A. の前身）という会を創立したとき、只一人岡山からはるばる入会を申込んで来た人が水野さんであった。それからまもなく私は岡山へ乗り込んで言ったが、初対面の水野さんが日の丸の国旗に大きく「天」という字を書いたものを駅のプラットフォムで振って、私の注意を促がされたのを今だに覚えてゐる。私もまだ若かったが、水野さんは私よりかなり年長であったと思われるのに、私よりもいつも元気で、張り切って居られたのには、こちらもはげまされた。いきなり有名な後楽園へ案内され、芝生のベンチに二人が腰かけながら、名物のキビダンゴを手に取りつゝ、いろいろ天文のことや、身の上話をせられた。まるで何十年来の友人みたいな気持だった。

それから私は何十ペン岡山へ行っただろう。又、水野さんも京都へ来られて、親族の御宅へは行かれないので、必ず私の宅に泊られた。

水野さんはきっすいの岡山っ子で、日清戦争――いや、日露戦争に従軍されたとかで、野津将軍の司令部付きで、陣営で星を見た話やら、又、学校で地理学を教へて居られるため、旅行が平生から好きで、気が向くとどこへでも独りで飛び出して行かれる話など、永いお付き合いのうちには、同じ話を何回も聞かされたこともあるが、実感だから、何回聞いて面白かった。

何としても天文には熱心で、邦文の天文書は悉く有って居られ、英書も十何冊かは座右に置かれたし、又誰をつかまえても天文談を始めて少しも飽きる所が無く、岡山の街の内外の友人を片っぱしから天文同好会の会員に入会させ、一時は岡山支部に会員が百何十名あったこともある。この熱心ぶりに感じて、（ママ）

水野さんは倉敷の原さんと中学時代に同級生であったとかで、生涯交際を続けて居られ、これが機縁となって、原さんの出資により今の倉敷天文台が出来たのだった。水野さんは死なれたが、倉敷天文台の存在する限り、水野さんは忘れられない。実にこの天文台は水野さんの記念碑である。最も水野さんに、ふさわしい記念碑であると言って宜かろう。

水野さんは一男三女をのこされた。男は“宅一君”という。この名からして命名のしかたで、面白い三人の御嬢さんは今はそれぞれ結婚して居られるが、結婚前にそれぞれ台湾、満州、南米あたりまで独り旅をさせられたのは、これ又いかにも地理学者らしい水野さんのしつけ方であったと感心させられたことがある。

（『星と空』第 35 号、1956 年 12 月号）

ゆかりの友（２）

古賀さんも大正九年、天文同好会創立以来の会員であった。初め大坂で株券などの商買などして居られたが、私との交わりは天文関係ばかりで、株の話など只の一回も聞かされたことはない。京都で天文の会合が開かれる時には大抵来て居られ、熱心に又楽しそうに聞いて居られた。背の高い和服姿で、角帯をしめ、端然とした態度で、大学の講堂に出入りせられた様子は今でも忘れられない。

私はよく大阪へも招かれ、他の会員たちと一しょに、いろいろ会合の世話などされた。二三回、大阪での天文講習会の主催もされたことがある。当時の写真などを私は今尚有って居るが、死なれた関西学館長吉田さんや、今も御健在の宮森作造さん、津田雅之（富山）さんと共に互いに親しい方々であった。

一般の人々には“古賀恒星図”の名が知られてゐると思う。こうした念の入った仕事を一介の株屋さんがやられたのだから、驚く。今だって、そんな趣味者は世間にめったに見付からないだろう。———それは大正十年の春頃の或る日だったと思う。古賀さんがひょっこり京都大学の私の室に訪ねて来られ、

“山本先生、こんなものを作りましたが、如何でせう”

と言いながら、風呂敷包みの中から取り出されたのが、あの恒星図であった。私はそれを手に取り上げて、

“ほーう”

と言ったまゝ、古賀さんの顔とこの星図とを何度も見比べた。株屋さんであり、又暇さへあればお宅で三味線をひかれるというこの古賀さんが、こんな星図を誰にも相談せず、独りで画いて楽しんで居られる様子を想像するだけでも愉快であった。私は

“これは大変良いものじゃありませんか！出版しませう”

といって、印刷屋へまわすことをすゝめた。求められるまゝに、私はこれに“古賀恒星図”という表題を付けた。大正年代の末の頃、この星図が同好会員や他の人々にひろく喜ばれたことを知ってゐる人も多かろう。

昭和の何年頃であったか、古賀さんは手紙一通を残したまゝ、大阪の店をたゝんで、九州大牟田の郷里に帰られた。何だか大阪の天文界が俄かに淋しくなった思いがした。まだそれは四つ橋にプラネタリウムが出来ない前だった。———九州へ帰られからの古賀さんは、只時々手紙をよこして下さるだけで、とかく御無沙汰がちであったが、ある年の秋、私は鹿児島へ行った帰途、わざわざ大牟田に下車して、相変わらずの元気な古賀さんの御宅に迎えられたことがあった。

それから更に十年もたって、戦争中であったか、突然久しぶりに大牟田の消印で、古賀さんから筆勢の弱々しい手紙を頂いたことがあったが、その後“又会いませう”と返事したまゝ、取りまぎれてゐる間に御令弟から訃報に接したのであった。

（『星と空』第 36 号、1957 年 1 月））

ゆかりの友（３）

伊達英太郎君

天文同好会が出来て以来、大阪かいわいには真にたよりとするに足る会員が多い。その中でも伊達英太郎君は最も有力な会員の一人であった。

伊達君は、同好会の創立以来の会員ではない。しかし、関東の大震災の直後、即ち大正の末頃には既に十数名に上る熱心なアマチュア天文家のリーダの一人として、伊達君は目立つ人物であった。生家は裕福な実業家で、市の中央部に立派な店舗を経営し、市の北郊雲雀丘には美しく手入れの行き届いた別荘を有って居られた。伊達君は多くの学友たちと交はるためにはしないの御宅の一部を解放して、小さい会合など度々催されたが、天体の観測や研究、執筆などのためには雲雀丘を基地としてゐたようである。伊達君を中心とするグループは、大抵皆二十代の元気な会員ばかりで、観測に熱心なのや、談論風発型や、夢のような計画ばかりして仲間を雲に巻く人やいろいろな人物が集まったが、伊達君は此等のリーダとして、皆に信頼されてゐた。京都からは中村要君が時々この仲間に加はったが、私も毎年一二回招かれるがまゝに南炭屋町の会合に出席し、又、雲雀丘の方にも泊めて頂いたことがある。

家庭を有たれてからも、すべてに恵まれた生活ぶりで、多くの人々を羨やませるに足るものであったが、どうしたわけか、健康が勝れず、そのためにやりたい天体観測も医師から止められる場合が多かったらしい。雲雀丘には口径 25cm と 15cm と 2 台の反射望遠鏡を備へ、身体の調子が良い時には、昼間は太陽、夜は木星や火星の如き遊星面の観測を伊達君は楽しんで居た。太陽黒点の立派な写真を沢山撮られたし、又一時は日本では余り例の無いプロミネンスの連続観測を行はれた。技術は真に優秀で、器械の能率を百パセント発揮された。遊星面観測の方でも多くの記録や報告文を遺されたばかりでなく、後輩の指導を熱心にやり、今日の O.A.A.の遊星面課の発達の基を築いた。大戦後、急逝されたのは惜しい限りである。

（『星と空』第 37 号、1957 年 2 月号）

ゆかりの友（４）

三沢勝衛さん

長野県には大正時代から有力な天文研究の芽生えがあり、今日も依然として希望の多い地域であるが、其の初期を飾る人物は諏訪の三沢勝衛さんであった。私が三沢さんを知ったのは、何時ごろであったか、ハッキリしないが、しかし大正 10 年頃には松代の中沢さんなどからの呼びかけもあり、年に何回となく長野県へ京都から出かけた。その頃既に三沢さんはいつも私の案内役だった。三沢さんは上諏訪に住んで居られ、近くの諏訪中学で地理学を教へて居られたが、この学校に当時としては珍しく一台の屈折望遠鏡があった。口径は 76㎜ で、三脚台に載ってゐたが、この器械を三沢さんは巧みに使いこなし、多くの生徒たちに天文の指導をされたのみならず、自身でも年真に観測を実行された。「天界」に太陽黒点の観測をすゝめる記事が出たのに刺激されて“太陽の観測をやりたいから”という手紙をよこされたので、私は或る年の夏の末、東北地方からの観測旅行の帰途（私自身帰りを急ぐので、途中下車する時間が無かったので）三沢さんに諏訪駅から望遠鏡を持ったまゝ下り列車に乗り込んで貰い、たしか塩尻駅に着くまで小一時間の間、車中で黒点観測の方法を説明したことがある。この事があってから、三沢さん独特の黒点観測が始まった。それから前後十五ヶ年にわたり、三沢さんは毎朝学校へ出勤前の短い時間に、又は学校での授業時間のあいまに太陽を見ることを続けられた。方法は眼視法で、ノート帖に見たまゝをスケッチされるのである。そしてこれを毎月末にまとめて、私の所へ報告されるのであった。――何しろあの熱心さで、十五年も続けられたのである。その間には身辺の内外、公私、いろんな事件もあったようであるが、しんが好きでやってゐる仕事であるから、どんな事情があっても止められるものでなく、従ってその間には前人未到の多くの発明や発見も行われた。誰でもが一種の誘惑に陥る如く、三沢さんも黒点観測をやり始めて三四年目の頃に、この観測を基として天気予報をやって見ようとされたが、これは私がすぐ忠告して思い止まらせた。しかし、観測の技術が進むにつれ、万事に研究的な三沢さんは、誰から教へられるということもなく、自身のスケッチ帖の記録から遂に黒点の微細な構造が渦巻き型になってゐることを発見されたのは驚かされた。この事は十年も前にアメリカのヰルソン山天文台で、分光太陽写真により発見されたことであったが、大正十年頃の日本にはこの事を書いた天文書がまだ出てゐなかったので、三沢さんは知らなかったのである。

しかし、三沢さんは所謂天文狂ではなかった。天文学の方法を地理学研究に応用することを本来の使命と考へ、多くの著書もだされた。

三沢さんは地理学者としても多くの業績を残された人で、その方面にもひろく認められてゐる。三沢さんは二十数年にわたる諏訪中学校教師として偉大なる感化を生徒に及ぼされた。その中にも、天文学の興味と貴い精神とを吹き込まれた少年たちが、後に成長して教育界に、又天文学界に現れた人物は多い。三鷹の古畑博士などはその優れた教え児の一人である三沢さんはまだ働き盛りに急逝して惜しまれた。(『星と空』第 38 号、1957 年 3 月

ゆかりの友（５）

古川龍城君

大正九年の秋、京都で“天文同好会”を創立した時、その創立委員の顔ぶれの中に古川龍城、滑川忠夫などの名がある。滑川君はその後純粋に気象学の方へ進まれ、今は京都大学のかなり古参の正教授の一人として健在してゐるが、古川君はつい二三年前岐阜県の郷里でなくなった由、聞いた。近年、長く御無沙汰してゐて、病気の事も知らなかったので、申しわけ無いことであった。

古川君はかなり以前からの東京の天文学会の会員であったらしい。岐阜県の人で、京都へ何時頃やって来たのか知らないが、私が水沢の天文台から京都へ帰任した頃、即ち大正六七年頃（？）古川君は京都の上加茂の地震観測所の職員であったように思う。私も明治の末の頃この観測所に起居してゐた縁故もあるので、大正になってからも度々上加茂に招かれて、茸狩りなどに行ったこともあり、話のうちに同君が地震学よりもむしろ天文学に対する興味が深い人であることを知り、自然交わりを重ねた。

大正九年、古川、滑川、百済、佐々木、中村、上田等の諸君と共に天文同好会を組織し、講演会を開いたり、雑誌を出したり、観測会を行ったりするため、いろいろ相談をした。その時、雑誌の表題を何と決めたら宜いか、皆が名案を持ち寄ったが、古川君の言い出した『天界』というのが簡単明瞭で宜かろうというので、それに決定した。あとで知れたことだが、天界というのは仏教の方で用いる語であるそうな。仏語だって、何だってかまわない。良い言葉である。古川君が岐阜県の或る寺院の出身者であるため、こんな良い名を持ち出されたのは当然である。百済君が其の後調べた所では、ドイツに Die Himmelswelt という天文学雑誌が、Vereinigung von Freunden der Astronomie という会から発行されてゐることがわかって、愉快であった。会の名も雑誌の名も日独相互に直訳したようなものである。

さて古川君は関東大震災の後、京都大学を辞して、三鷹の天文台に移られたが、更に其の後天文台を辞して、“何々の知嚢”と言ったような表題の通俗天文書を出したり、ピケリングの“火星”を訳したり、専ら著訳者としての生活に入り、それから又一時国民新聞の科学記者になったりされた。私とはさっぱり音信が無くなったので、只年賀状くらいの付き合いしかしなかったが、終いには古川君が星の代りに鳥の本を出したりしたことから見ると、天文学の官僚界からいや気が、さしたものらしい。晩年にいつ岐阜県の郷里へ帰られたか知らないが、最近坂井氏から古川君の逝くなったことを聞かされて、一人の名物男を失った感に耽った。しかし“天界”は永続するだろう。

（『星と空』第 39 号、1957 年 5 月）

ゆかりの友（６）

大庭濱子さん

大正九年頃の或る日、木村清松牧師から横浜に大庭さんという夫人があって、天文に大へん御熱心だという話を聞いたことがあり、その後、まもなく同師の紹介で、東京からの帰りに大庭さんを訪ねた。すると、大きな貿易問屋であって、多数の使用人を置いて居られる家の主婦であったが、極めてしずかな落ちついた人柄で、そして又極めて熱心な天文ファンで、私との挨拶をすむや否や、星座の話ばっかりを続けさまにされるのだった。客間には天文書や星座盤などを勿論沢山持って居られたが、あけて見ると、それもこれもよく読まれており、又星座早見幾つも買って、友人たちに頒ち与へ、星座の美を紹介されるのが日頃の大きな楽しみであったらしい。望遠鏡などは大きいものは持って居られなかったが、夜になって磯子の海岸にある別荘に帰られると、その岸辺に出て、毎夜星座を見るのが、此の上ない楽しみであったという。私の処女作“星座の親しみ”をこの大庭夫人に献げたのは当然のことである。

ところがこの大庭さんも大正十二年の大震災には大きい被害を受けられたらしい。私はその時アメリカに居たが、同十五年に帰ってまた後、時々気にかかるので大庭さんのことを人に聞いて見たが、どうにも確かな消息が得られなかった。そして今はもはや震災後 34 年目である。若し大場さん御一家が御健在であるならば、こちらが気にしてゐる如く、あちらでも忘れずに居て下さるだろうと思うのだが、今だに何の音沙汰も無いことから見ると、少なくとも大庭夫人は或は亡くなられたのでないかと思はれる。

誰か御存じの方があれば、御知らせ願いたい。

この大庭さんが御存命であれば、私よりもかなり御年上なので、今はよほど御高齢であるに違いない。しかし、あれほど星に親しみ、殊に星座をあれほどよく御存じであった大庭さんのことであるから、老年になられても、決して星への親しみはお忘れになることはあるまいと思はれる。却って、御老年であればあるほど、御引退の大庭さんには星の魅力は芽生えるものと信じたい。七十になられても、八十になられても、ひたすらに星や星座への情熱をいやましに有たれるであろう老夫人の御心境を想像するだけでも、何となく奥ゆかしく思はれる。天文学は日に月に大進歩をつづけ、新しい発見や、新しい話題は次ぎ次ぎに知れて来てゐる。しかし、応接に暇も無いこうした学界の動きから超然として、古今東西に通じる星座の美への憧れを有ち続けるということも、星を愛する人の特権であるべき筈である。

（『星と空』第 40 号、1957 年 6 月号）

ゆかりの友（７）

水野恭介さん

以前から三鷹の天文台に勤めて居られ、辞められてから一時横須賀の或る学院に教へて居られたが、最近東京に出来たプラネタリウムの主任となられた水野良平さん――この水野さんに恭介さんと呼ばれる兄さんが居られたことは知らない人が多いかも知れない。しかし私はこの恭介さんを良平さんよりもずっと以前から知ってゐるのである。

それは 1923 年（大正 12 年）の秋、私はカリフォニアに於ける研究期間を終り、三度び大陸を横断して、ニウイングランドのハーヴ―ド大学の天文台に落ちついた時、或る日同学の室住君の紹介で初対面したのが、この恭介さんであった。恭介さんは当時世界三大海軍国の一つとして注目されてゐたわが日本の海軍少佐であったが、海軍省から派遣されて、米国へ語学研究のため来て居られた人である。勿論海軍兵学校出身のスマートな青年将校であったが、ついぞ一回も軍服姿を見せたことはない。いつも瀟洒なセビロを着、全く日本人ばなれした百パーセントの社交エチケットを身につけた紳士として、又英語や英文に関する素養もズバぬけて立派なもので、どこへ出しても恥ずかしくない人であった。尚、典型的なクリスチャンで、この方面にも立派な人格者であった。海外で身を持ち崩す軍人も多い中に、日本海軍はよくもこんな立派な青年将校を有ってゐるものだと、私共はこの恭介さんに交はる日々の重なる毎に感心したものだった。

恭介さんは兵学校卒業生だったから、星や天文のことは一通り心得て居られた。それに読書家であり、文学好みでもあったから、そうした方面からの星への親しみも深かった。私は恭介さんを幾度もハーヴ―ドの天文台に案内した。その日は恭介さんも楽しいらしかった。

こんどは恭介さんに案内されて、ケンブリッジ市の内外、エマソンの旧宅や、レキシントン、コンコードあたりの歴史や文学にゆかりのある土地、それから海岸のセーレムまで脚を延ばして、まだ健在であった老動物学者モールス博士、ピーボディ博士、それに恭介さんが一時下宿して居られたというアダムズ家などを案内された。アダムズさんの主人たちは恭介さんのことを恭（Kyo）と呼んで居られたので、私共もそれからは恭介さんのことを恭さんと呼ぶようになった。モールス博士は明治の初め東京の政府に招かれて大学で動物学を教へた人であり、明治天皇から勲一等を賜わった人であるが、又大森の貝塚を発見した日本考古学の恩人であり、又同時に“火星”の本を書いた人でもある。私が恭さんの御蔭でこのモールス博士に会へたのはうれしかった。又、恭さんの御蔭で、アダムズ一家と私共とも其の後特に親しくなり、単独で同家を幾度も訪ねたことがあり、幾年後までも交信した。

1924 年の夏、恭さんは一足さきに米国を去られ、私共もまもなく去って、欧州経由で帰国した。それ以降、日本でも恭さんは私共の貴い友人であった。恭さんは帰朝後海軍軍人として益々重用せられ、皇太子の御付武官として英京ロンドンに行かれたこともあ

り、又或る機会にユダヤやエルサレムあたりを旅行して、“新約のゆかりを求めて”という立派な旅行記を出版されたこともある。一時、宮中武官として、宮内省の式部に関係されたこともあった。

大戦が起こった時も、恭さんは宮中に仕えて居られたが、あのやさし心根の持ち主である恭さんも、じっとして居れなかったと見え、特に志願して出征された。ところが戦地へ赴任の途中、ラバウル沖で飛行中に敵機に攻撃され、あえなく亡くなられたのは、戦陣の常とは言へ、惜しいことであった。———御令弟良平さんの天文趣味も恭さんからの感化にあるのでないかと私は想像してゐる。(山本)

(『星と空』第 41 号、1957 年 7 月)

ゆかりの友（８）

スコフィルドさん

つい数日前、大阪の或る古書店の棚を見てまわった時、R. Schofield の Code-Book というのが二冊も並んでゐるのを見て、いろいろ昔のことを思い出した。スコフィルドさんは本名を Richard Schofield というが、神戸生れの英国人で、母上は日本人であったという。本職は電信 code を作る人であったが、元来が理学趣味の人であり、いつの頃からか望遠鏡を買い込んで、中山手の住宅の屋上に据えつけて、日夜観測に耽った人である。

話は少し遡るが、大正十一年頃、大阪にケネディ（Kennedy）という英人がゐて、当時まだ日本と諸外国との間に公式な天文電報の取りやりが無かった頃、このケネディ氏がどこから手に入れるのか（恐らく、上海あたりからでもあったろう）天文学上のニウス電報を度々京都大学の天文教室に知らせてくれたものである。このケネディ氏が或る日、神戸のスコフィルド氏を連れて、大学へ遊びに来たことがある。それは大正十四年、私が欧州から帰ってきてまもない頃だと思う。（少し記憶が怪しいが）実は、その頃、私より前にスコフィルドさんは中村要君と交際してゐた。私が京都大学のためにクック製の 30 センチ屈折赤道儀を 1,000 ポンドで買ったという話をした所、それは Gift だと言って、驚き且つ喜んでくれたのも、このスコフィルドさんだった。

私も度々神戸へ行って、スコフィルドさんを訪ねた。スコフィルドさんは中村君と特に親しく交際してゐたが、1932 年に中村君が死んでからは、私との交わりが一層深まった。ケネディさんも、いつのまにか、大阪から横浜に移られたので、スコフィルドさんはかなり淋しがって居たようだ。

スコフィルドさんは忙しい仕事のあいまに、天文だけでなく、いろいろの方面に手を出す人であった。スコフィルドさんは、英国の国籍を有ってゐたので、大正十年頃から、シナの事について、日本と英国との関係がむつかしくなると共に、よほど苦労されたらしい。警察へ呼ばれたりしたことは度々あるらしい。そんなことから、天文の観測はだんだん進まなくなった様子であるが、気象や化学の研究は止められなかったらしく、又、無線電信の研究をかなり熱心にやられたので、これが特に国際上から警察が眼を光らせたもののようである。

天文の熱がさめると共に、スコフィルドさんと私との交際も、大戦の始まる頃から多少淡らいだが、そのうち急に亡くなったことを夫人から知らされて驚いた。スコフィルドさんの死後の諸器械のあと仕末には、夫人に依頼されて私も手伝ったが、口径 20cm のカルヴァの反射鏡は長野県の一希望者に譲られた。それから観測帳や何やかや、大抵のものは私が今預かってゐる。日本の天文学上の大切な記録なので、何とかして公表したいものもあるが、資金が無いのでそのままになってゐる。

（『星と空』第 42 号、1957 年 8 月号）